

社会心理学の批判：フロイト主義を中心に

著者	芝田 進午
雑誌名	社会労働研究
巻	4
ページ	155-207
発行年	1955-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017402

社会心理学の批判

——フロイト主義を中心——

芝 田 進 午

一、イデオロギーとしての社会心理学

二、フロイト主義の批判

三、フロイト主義社会心理学の批判

四、フロイト主義とマルクス主義

五、新フロイト主義社会心理学の批判

六、フロイト主義とアメリカ・イデオロギー

一、イデオロギーとしての社会心理学

この論文の目的は、主としてフロイト主義・新フロイト主義を中心としてみた「社会心理学」の批判的検討である。

一九四五年以来、わが国は一貫して合衆国の従属下におかれてきた。そして占領十週年を経過した今日、われわれは、いろいろの角度から、わが国にたいする合衆国の支配を分析し、これを批判する任務をもっている。たしかに政治・経済の分野では、一九

五一年、日本のマルクス主義者はアメリカ帝国主義と従属下の日本について正しい科学的分析に到達したと、われわれははつきりいうことができる。しかしイデオロギー批判の分野からみるばあい、アメリカ・イデオロギーの研究と批判は決定的にたちおくれている。プラグマティズム、マルサス主義、ケインズ主義等々、現代アメリカ・イデオロギーの諸形態にたいする批判はごく最近はじめられたにすぎず、またイデオロギー支配の具体的分析もわずかにその第一歩をふみだしたにすぎない。

戦後におけるアメリカ・イデオロギーの浸透と支配にたいする批判がたちおくれた理由はいろいろあるが、その一つとして、われわれはここでとくに、アメリカ・イデオロギーの没イデオロギー的、性格に注意したい。一般的にいってアメリカ・イデオロギーは、イデオロギーであるにもかかわらず、多くのばあい、あたかもイデオロギーでないかのような、また世界観ないし哲学でない

かのような性格をもっている。なぜなら、アメリカ・イデオロギー自体が、世界観ないし哲学でないことをほこるイデオロギーだからである。「アメリカは文明世界で一番哲学が研究されていない国である。」だが同時に、「アメリカの住民はすべて同じようにその精神をはたらかせ、同じ規則にしたがって行動する。すなわちアメリカ人は、かれらすべてに共通のある哲学的方法をもっている。」⁽¹⁾かつて一八四〇年、アレキシス・ド・トックヴィルはこのようなにのべた。かんたんにいえば、アメリカには「哲学でない哲学」が支配しているというのである。この有名な言葉は、「古典的アメリカ・イデオロギー」(独立革命から南北戦争にいたるブルジョア民主主義革命のイデオロギーをわたくしはこのようになづけて、帝国主義段階のアメリカ・イデオロギーとはつきり區別する)についてのべた特徴づけであるが、この言葉は非常に厳密な保留条件をつけられ、今日のアメリカ・イデオロギーにもあてはまるとわたくしはかんがえる。

そしてこのようなアメリカ・イデオロギーの没、イデオロギー的
性格は、第一にアメリカ・イデオロギーの「技術的」特徴にあら
われている。たとえばプラグマティズムないし道具主義インストルメンタリズムは、今
日の日本で支配的なイデオロギーになっているが、このばあい、
プラグマティズムが日本国民のうちに厳密な意味で「哲学」とし
て、また政治的な「イデオロギー」として浸透していることをか
ならずしも意味しない。ジェームスやデューイという名前を知ら

ないプラグマティストは沢山いるし、「プラグマティスト」と自称しないプラグマティストが沢山いる。多くのばあい、プラグマティズムはみずからイデオロギーであると自称するのをさけ、むしろ「モダン・リヴィング」と密着し、風俗と密着し、便利な「処世術」として、生活の「テクニク」として浸透してきたことに問題があるのである。日本のマルクス主義者がごく最近まで、プラグマティズムをイデオロギー支配の一環として把握することができず、その批判にとりくまなかったのは、このためである。

アメリカ・イデオロギーの没イデオロギー的性格は、第二にアメリカ・イデオロギーの「科学的」特徴にあらわれている。それは本質上きわめて古く、反科学的であるにもかかわらず、表面的にはもともと「新しく」て「科学的」な偽装をつけている。アメリカ・イデオロギーは、多くのばあいイデオロギーでないかのよるな仮装をもち、階級対立とイデオロギーを超越した「科学」としての存在権を要求しているかにみえる。このような「科学」にぞくするものには、たとえば戦後日本で流行している「社会心理学」、「マス・コミュニケーション理論」、「意味論」、「記号論」、「近代政治学」、「文化人類学」、「ゲームの理論」、「サイバネティックス」、「ソシオメトリー」、「軍事科学」、「性科学」などがある。こうしてわが国の二、三のマルクス主義者は、まさにこのような「科学的」仮装にこそアメリカ・イデオロギーのイデオロギーたるゆえんがあること、まさにこの点をこそ批判しなければなら

らないことを忘れて、これらの「科学」からマルクス主義者は学ばなければならぬと主張した。⁽²⁾アメリカ・イデオロギーは、しばしば「イデオロギー」でなく、むしろ「技術」ないし「科学」であるかのような外観をもっている。しかしわれわれは、だからといってこれらの「技術」ないし「科学」のより一層露骨なイデオロギー性を見逃してはならない。たんなる「技術」の問題、あるいは超階級的な「科学」であるようにみせかけることにこそ、アメリカ・イデオロギーのイデオロギッシュな本質があるからである。

このような「科学」の一つとしてここでは「心理学」をとりあげてみよう。最近、出版ジャーナリズムでも学界でもよく耳にされる言葉に「心理学ブーム」というのがある。近ごろは、書名に「心理」という文字を使うとよく売れるそうである。河出書房の『現代心理学講座』は大当たりだそうであり、「心理学入門」といった書物が沢山売れているそうである。また精神分析を応用した性科学書はアメリカの翻訳が多く、さらにおびただしい「子供のしつけ」の本や絵本にまで児童心理学者が解説をかく習慣も戦後のいちぢるしい特徴であろう。占領下の教育での大きな特徴は、技術面に重点がおかれていることであり、ガイダンスの基礎はさまざまな心理学である。小中高校教師は競って教育心理学をひもとき、保母試験にも心理学が必要だとされるほどである。

では一体どうしてこんなに「心理学」が流行するのであろう

か。「心理学」が、苦しい生活の真の原因をあばき、そこからみずからを解放する正しい道を日本国民にしめすからであらうか。「心理学」がきわめて科学的であり、正しいものの見方、考え方をおしえるからであらうか。これにたいする答えは、実は、『心理学ブーム』は現代を救えるか」という記事をのせた『朝日新聞』（五五年四月九日）自身のうちにみいだされる。同紙はこのべている。

「戦後の社会不安が生んだ風潮は、人間とは何か？ 生きるとはどういうことか？ その解答を求めずにおれない。戦前の青年達は、それを哲学に求めたが、思想の自由や学問の解放時代がきて、かつての哲学青年に代り社会科学青年とでもよびたい人達があふれた。とくにマルキシズムの流行だ。だが、マルキシズムには心理的観察がない。その欠点を埋めたものが心理学である。」

「マルキシズムには心理的観察がない」という意見がどんなに皮相な観察であるかは、ロシアとソ同盟のすぐれた心理学者・生理学者であったセーチェノフやパヴロフ、さらにその後の条件反射理論の研究成果をみればあきらかだろう。しかしここで重要なのはこのことではない。重要なのは、今日、「心理学」がマルクス主義の「欠点を埋め」、社会科学にとってかわろうとしてたち

あらわれていることである。『朝日新聞』のさきにあげた記事を引用すれば、「心理学主義とマルキシズムの対決」が要求されているのである。こうして今日の「心理学ブーム」——その主要内容は「社会心理学」である——は、たんなる一「科学分野」の流行にすぎないのではない。「科学」という看板をかかげながら、実はもっともイデオロギー的な「流行」なのである。

「心理学」ないし「社会心理学」が、一見、イデオロギー問題とかかわりのない「科学」であるようにみえながら、実はどんなにイデオロギッシュであるかは、たとえば、それが最大限利潤を追及する米日独占資本によって「生産性向上」のため、いかに動員されているかをみればあきらかだし、また今日、それが、軍事的目的に利用され、さらにすべての平和愛好者をおびやかす「心理戦争」のイデオロギー的背景になっていることを知れば明白だろう。そのうえ、このような「心理学」あるいは「心理学主義」は、近年はつきり正体をあきらかにした福田恒存氏の思考方法になっている。福田氏によれば、「わたくしたちは心理的に考え、心理的に行動する。」だから日本人に平和擁護の問題を論理的・合理的に説いても無駄である。日本の民衆は「恒久的な平和はありえないと信じている。それがかれらの心理的現実である。」⁽⁶⁾つまり民衆は戦争はかならずおこるという「心理的現実」をもって、いるから、平和運動などやってもだめだと福田氏はいっているのである。うたがいのなく、ここでは「心理学主義」は非合理主義の

「合理主義的」か、⁽¹⁾く、⁽²⁾れ、⁽³⁾み、⁽⁴⁾の、⁽⁵⁾になつてゐるのである。こうして、「心理学主義」(その主要な形態は「社会心理学」である)の批判は、まさに今日のイデオロギー闘争の緊急の課題である。それはマルクス主義者だけでなく、すべての平和を愛する科学者がそろってとりあげなければならない課題なのである。

わたくしは、本誌前号で『アメリカ心理学の批判』と題して主としてジェームス心理学とデューイ社会心理学について批判的検討をくわえた。したがってここではその続篇として、現代のブルジョア心理学ないし社会心理学の主要な一派であるフロイト主義・新フロイト主義をとりあげることにした。

フロイト主義ないし新フロイト主義が、現代日本のいろいろの社会心理学者の主流になっているだけでない。のちにもくわしくみるように、この「心理学」は、精神医療の面にかぎらず、ひろく教育学、社会学、文化人類学、近代政治学の理論的背景になり、また映画・文学・芸術はもちろんのこと、はては新興宗教、戦争不可避論、ファシズムのイデオロギー的背景になっているからである。

註(1) Alexis de Tocqueville, *De la Démocratie en Amérique*, Tome II, Paris, 1951, pp. 11—12.

(2) 小田切秀雄『ふたたび思想の平和的共存について』、『世界』五五年五月号および石田雄『明治政治思想史研究』三七二—三ページ。

(3) われわれはこれにかんする文献を無数にあげることがで

と云ふ。 Cf. J. H. Rohrer and M. Sherif, ed., *Social Psychology at the Crossroads*, N. Y., 1951, Chap. 12, 14.; S. S. Sargent, *Social Psychology*, N. Y., 1950, pp. 474—477.; T. M. Newcomb and E. L. Hartley, ed., *Readings in Social Psychology*, N. Y., 1947, pp. 437—465. 日本におけるその「実践」については、たとえば『朝日新聞』五五年五月二三日、七月二日付をみよ。また Cf. Jan Marek, "Who Needs 'Psychological Selection' Propaganda", *For a Lasting Peace, for a People's Democracy!*, July 29, 1955.

(4) Cf. E. G. Boring, *Psychology for the Armed Services*, Washington, 1946.

(5) Ю. Арбатов, «Империалистическая пропаганда США—угроза миру и безопасности народов», *Коммунист*, No. 7, 1955.

(6) 福田恒存『進歩的文化人への批判』、『読売新聞』五四年十一月二五日。

二、フロイト主義の批判

フロイト主義とは、一八九五年、ジクムント・フロイトがヨゼフ・ブロイエルとともにウィーンで『ヒステリーの研究』を刊行し、その後独自に『夢の解釈』（一九〇〇年）、『日常生活の精神病理』（一九〇四年）を発表して以来、とくにアメリカ合衆国で支配的になった精神分析の理論である。

それは最初まったく微々たる勢力であったが、たちまち心理学

および精神医学において支配的な地位を獲得し、国際的に数種の学会をつくり雑誌を刊行し、無数の病院を支配し、さらに社会学、人類学、歴史学、政治学などの諸科学や映画、芸術、またユネスコのような国際文化交流機関をさえも指導するイデオロギーになった。⁽¹⁾

フロイト主義（精神分析）はどんな役割をはたしてきたか。フロイト主義が心理学を革命化したとみなし、フロイトを精神の世界におけるニュートンに比す人がある。またフロイトの理論が性モラルを解放し封建的な偽善に打撃をあたえたといつて、これに進歩的役割をみとめる人がある。たしかに、ブルジョア心理学ないし精神医学のすべてが非科学的であったわけではなく、また進歩的な役割をはたさなかったわけではない。ブルジョアジーが進歩的であり、上昇期にあったかぎり、またブルジョア心理学者・精神医学者が唯物論的であったかぎり、その心理学はいつも科学的であり、また進歩的な役割をはたした。たとえばこのようなくれた心理学者として、われわれは、一七八六年に『精神能力にたいする物理的影響の研究』をかいだアメリカの精神医学の父ベンジャミン・ラッシュ（一七四五—一八一三）をあげることができ、またロシアの精神医学の創始者セルгей・セルゲーヴィッチ・コルサコフ（一八五四—一九〇〇）をあげることができる。しかし資本主義が死滅する段階、すなわち帝国主義段階のブルジョア心理学にかんするかぎり、なかでもフロイトの精神分析に

かんするかぎり、それはすこしも科学的でなく、またけつして進歩的な役割をはたさなかったとわたくしはかんがえる。

結論からのべてしまったようであるけれども、もちろんこのことは、フロイト主義が科学的・唯物論的・弁証法的にみえること、またフロイト主義が進歩的な役割をはたしたかのようにみえることを否定しない。したがってわれわれのフロイト主義の批判は、なぜフロイト主義が科学的・唯物論的・進歩的にみえるのか、この論理的メカニズムの分析からはじめなければならぬ。

フロイト主義の論理構造は、大まかにいって三つの段階にわけることができる。その第一の段階は、フロイトによる従来の心理学・精神医学にたいする「革命的」批判である。

われわれはここで、フロイトがどのような科学的環境のなかで育ったかに注意する必要がある。フロイトの生れたのは一八五六年であったが、その二年前にはエーリッヒとベーリンクが生れ、またバヴロフの生れたのは一八四九年であったが、その四年前にはメチニコフ、七年前にはコッホが生れていた。この年代誌は、表面的には無意味で偶然的にみえるけれども、コッホ、メチニコフ、エーリッヒ、ベーリンクがほぼ同じ時期に生れたことは、医学史上きわめて大きな意味をもっている。一九世紀後半の医学上の研究成果はほとんどこの四人の医学者の名前であらわされるからである。当時は微生物の発見によって医学が長足の進歩をとげたときであり、ほんのわずかまえまで革命的とみられていたルー

ドルフ・ウィルヒョーの細胞理論の欠陥があきらかになりつつあった。一方では、実験その他によって新しい事実が発見されていたのに、これを正しく理解すべき理論はまったくたおちくれている。当時の医学は、一方では、数多くの成功になれた指導者たちの経験主義・実証主義で支配されていたが、他方では理論の上では根本原則はまったく不明瞭のままにのこされていた。もともと自然科学者・医学者は唯物論的であるにもかかわらず、その世界観の未熟のため理論の上ではまったく不可知論と神秘主義におちいついていたのである。⁽²⁾

同様の事情は心理学においてもみられた。当時、ウェーバー、フェヒナーによって外部刺激の強さと感覚の強さとのあいだに一定の数量的関係があるという法則が発見されたため、精神物理学という特殊な分野がつくられたようにみえた。しかし、この「新しい」分野は、その唯一の「ウェーバーの法則」よりさきへは一步もすすまなかった。またヴントもいわゆる実験心理学によって心理現象を数量的に測定する実験をはじめたが、その理論においてはやはり不可知論におちいり、複雑な心理現象や異常心理の現象を説明することができなかった。

フロイトがその学説をつくりだしたのは、まさにこのような環境においてであった。心理学、精神医学、医学における空虚な実証主義と静的な機械論的方法、思弁哲学に、かれはあきたらなかつた。そしてその反動としてかれは「新しい理論」へむかっていた。

った。フロイトは、ウィーン大学のブリュッケからウィルヒョーの細胞理論を学んで細胞を孤立した独立なものとしてとらえ（ここからのちにみる「リビドー」の概念がでてくる）、マイネルトからは中枢神経系の神経伝導路・領域にかんする独特の学説を学んで神経病理学を図式化した。またパリにおいてはシャルコーのもとでヒステリーを研究し、ナンシー学派の催眠術からつよい影響をうけた。一般にフロイトは臨床に注意したといわれており、また本人もそういつてはいるが、⁽³⁾実際は臨床と実験にまったく背をむけ、⁽⁴⁾もっぱら「純粹に心理学的立場」から研究することを提唱した。

こうしてフロイト主義の第一の論法は、旧来の一切の思弁哲学、感覚生理学、実験心理学を批判することであつた。フロイトによれば、これまで、学生は生物体の機能やその障害を解剖学の基礎の上にたて、化学的・物理学的に解釈し、また生物学的にとらえるよう教育されてきた。このため医学は全然、心理現象を理解することができなかった。かれはのべた。「思弁哲学も記述的心理学もまた感覚生理学とむすびついていたいわゆる実験心理学も……身体と精神のあいだの關係についてなにか役にたつことをいうことができず、また精神機能のおこりうべき障害を理解する鍵をあたえることができない。⁽⁵⁾」従来の精神医学はその觀察した精神病を記述するばかりですこしも説明しようとしな。また症状の由来やメカニズムは腦の解剖学的分析で証明できる変化とまつた

く一致しない。したがって、「精神分析のうづめようとするのはこの間隙である。精神分析は精神医学にこれまで欠けていた心理学的基礎をあたえようとする。……このため、精神分析は、解剖学的・化学的あるいは生理学的性質をもった縁のない前提から解放されて、徹底して純粹に心理学的な補助概念をつかつて研究しなくてはならない」というのである。もちろん、当時の精神医学ないしは心理学を支配していた「思弁哲学」を批判することはきわめて結構なことである。しかしこの「思弁哲学」を攻撃すると同時に、フロイトは一切の唯物論的なもの、自然科学的方法をなげすてる。解剖学、化学、感覚生理学、実験心理学、すなわち自然科学的方法にかわつて、いまや新しい「心理学的な方法」がとつてかわらねばならない。

自然科学的方法を「批判」したフロイト主義の第二の論法は、そのかわりに「心理学的な方法」をとりいれ、精神現象の「深層」にまで「洞察」して、これを力学的にダイナミックに説明することである。「われわれは、たんに現象を描写したり分類したりせず、むしろ現象を精神にひそむ力の作用の現れ、また協力し反撥してはたらく目的追求の傾向の現れとみた。われわれは精神現象の力学的理解をもとめてやまなかつた。⁽⁷⁾」

このようにして、フロイト主義は心理的決定論を主張する。われわれは、しばしば、たとえば意志は自由だとか、心は勝手気儘だとか思いこんでいるが、実際はこれは幻想にすぎず、われわれは

「精神生活をも支配している決定論の要求」⁽⁸⁾のまえに屈服しなければならぬ。物理学で因果律が通用するように、心理的現象においても因果律が通用しなければならない。われわれのあらゆる思考、思考の継起、夢、幻想、言いまちがい等々は、心理的決定論によって支配されている。しかもこのばあい、ある心理的現象がおこる理由はかならずしも明確であるとはかぎらない。多くのばあい無意識であるが、それにもかかわらず決定論が存在するというのである。たしかに心理現象にも因果関係がはたっていることは本当である。そしてこの点を主張するかぎり、フロイトは観念論的な「意志の自由」論者よりは唯物論的であるようにみえる。しかし注意しなければならないのは、フロイトの「心理的決定論」は、人間の神経系の活動や生理的諸条件ならびに社会的・歴史的諸条件と全然きりはなされたものであるだけでなく、むしろこれらを排除するものであることである。したがってフロイトの「決定論」はけっして唯物論的ではなく、むしろ唯心論の立場にたつといわなければならない。

さて、一切の心理現象が決定論に支配されているならば、そして生理的・社会的諸条件からまったく無関係に決定されるとすれば、この心理現象を決定するものはなにか。それはそれ自身、心理的なものであるほかはないだろう。しかも多くのばあい、意識されていないのであるから、無意識的な存在といわねばならないだろう。かくしてフロイト主義は、つぎに無意識的精神活動が存

在すると主張する。

「精神分析の人から好かれない主張の第一は、精神現象はそれ自身無意識であり、意識現象は全精神生活の一行動、一部分にすぎないということである。……そしてわたくしは、無意識的精神現象を仮定したことによって世界と科学において決定的に新しい方向をひらいたと断言することができる。」⁽⁹⁾

これまでの心理学は意識だけをとりあつかつて無意識を無視してきたが、これはまったく転倒しているとフロイトはかんがえる。たとえばある神経症患者を催眠術にかけると、この患者はかれが正常の状態ではおもいだすことのできなかつた沢山の経験をおもいだすことができる。意識的なものはどのようなものでもその以前の段階としてかならず無意識の段階をもっており、後者が一切の精神活動を決定する。無意識こそ「真の心理的実在」だとされるのである。

すでにみたように、フロイトは、第一に、旧来の空虚な「形而上学」と「思弁哲学」を批判し、経験主義的・実証主義的・機械論的な精神医学と心理学を批判し、自然科学的方法に攻撃をくわえた。そして第二に、これにかわって動的な心理学的方法を導入し、心理現象の「深層」にはいつてこれを決定論的に説明することを主張した。こうしてフロイト主義は、いまやかの旧来の形而

上学や思弁哲学から解放され、また機械論的なものの見かたをまぬかれたようにみえた。心理現象は決定論的にすなわち科学的に把握され、また心理現象の「深層」から動的に、弁証法的に理解されるようになったようにみえた。ところがフロイトが導入する第三の論法は、かれがはじめに批判した「思弁哲学」と機械論的自然観を、こんどは新しい外観にかくれて裏口からこっそり密輸入してやることである。「無意識」を思弁的に実体化し、形而上学化して、これを本能的いし衝動という機械論的な生物学的概念で「説明」することである。⁽¹⁰⁾

フロイトはかんがえる。すべての精神生活を決定するものが無意識であるとすれば、この無意識をうごかしているものはなにか。すべての人間の行動を決定するエネルギーはなにか。それは本能的衝動、とくに性衝動である。

「精神分析がその業績の一つとして公けにしたもう一つの命題は、人々が狭義にも広義にも性的と特徴づけうる衝動は、神経病および精神病をひきおこすうえで、これまであまり重視されなかったがきわめて大きな役割をはたすという主張である。いやそれ以上に、この性衝動は人間精神の最高の文化的・芸術的・社会的創造に軽視しがたい貢献をしたのである。」⁽¹¹⁾

フロイトはこの性衝動に「リビドー」(Libido) という名前をつけた。そしてこのリビドーの進化が一切の人間のパースナリティの発展を規定するとした。それは人間に固有のものであり、子供のときから人間の発育を決定する。フロイトは、パースナリティの発展に、小児期、潜在期、思春期の三つの段階をかんがえる。生れてから五ないし六才までつづく小児期では、子供のリビドーは生物学的欲求あるいは直接的満足にむけられる。リビドーは、最初はしゃぶったり乳を吸ったりする口唇に固着して快感をおこさせ(口唇期)、つぎに肛門に固着して排泄活動を学習させたり清潔にするとか着物のきかたを学ばせ(肛門期)、小児期の最後には陰茎に固着して、子供に性と生殖について好奇心をおこさせる(陰茎期)。だが以上の進化の段階では、リビドーはいずれのばあいにも自分自身の身体のいろいろの対象に固着するにすぎない。しかしリビドーは一層進化して、自己性愛をすてて、自分自身の外部の対象にむかってゆくとフロイトはかんがえる。すなわち、小児期の終りには、リビドーは小児の異性の親にむけられる。男の子はその母親に愛情を感じ父親を憎悪する。また女の子はその父親に恋をし、母親にたいし嫉妬をいだく。そしてこのような「心理現象」をフロイトは勝手に普遍化し、有名なギリシャ神話にちなんで「エディプス・コンプレックス」となづけた。⁽¹²⁾

「人間の最初の対象選択はつねに近親相姦的である。」⁽¹²⁾ あらゆる子供がこのようなコンプレックスを経験したのだというのである。

る。しかもフロイトによれば、このエディプス・コンプレックスはけっして小児期の終りの時期だけにかぎられるのではない。それは同性の親によって「去勢」されるのではないかという恐怖感によって「抑圧」され、「無意識」になるが、しかもなお、成長した個人の行動の無意識的な動因になる。いまや個人的心理現象だけでなく、一切の社会的矛盾も「抑圧」されたエディプス・コンプレックスによって「説明」される。たとえば、フロイト主義者によれば、労働者が資本家をにくむのは、前者が後者のうちに「父のイメージ」をみるからである。労働者は、かれの小児期にうまれその後「抑圧」されて無意識化されたエディプス・コンプレックス(父にたいする憎悪)を資本家におきかえたにすぎない。みられるように、フロイトのエディプス・コンプレックスの「理論」は、労働者階級の資本家にたいする闘争を「性衝動」の転化したものだとし「説明」し、漫画化し、このような闘争は不合理で非現実的だと主張する。この「理論」は、歴史を偽造し、漫画にする。たとえばアメリカのフロイト主義者A・ブロンソン・フェルドマンは、南北戦争はリンカーンに象徴された「父のイメージ」にたいする南部のエディプス・コンプレックスからおこったものであり、またリンカーンが暗殺されたのは、人間に固有のどうにもならぬエディプス・コンプレックスのためだと「説明」するのである。そのほかイギリス革命におけるクロムウェルやフランス革命におけるロベスピエールの行動、さらにはヒットラーの反ユ

ダヤ主義をさえ、エディプス・コンプレックスによって「説明」するフロイト主義者が沢山いる。(C・バイコフスキー、P・ルコンブ、G・M・カートその他)⁽¹³⁾ある意味でエディプス・コンプレックスは、フロイト主義の中心概念にさえなっているのである。

さて、本論にかえって、フロイトのリビドーの「進化論」をつづけて見よう。ふつう、このエディプス・コンプレックスは同性の親にたいする恐怖感に抑圧されて無意識化しごく短い期間つづくにすぎず、ついで小児は約六才から十二才ごろまでつづく潜在期にはいる。いまや性的関心は、知的ないし社会的活動に従属させられ、小児は異性の親にたいしては無関心になる。この意味でリビドーの潜在期は同性愛的だとフロイトはかんがえる。リビドーは力をもとめるといふ方向へむかってゆき、同時に同性の親にたいする恐怖感によって「超自我」が小児の心にうまれてくる。すなわち良心がうまれて、小児はなにが正しいか悪いかについて意識するようになる。

子供は、ほぼ十二才になると思春期にはいる。性的関心がふたたびうまれてくる。この年頃には性器は十分に発育しており、リビドーはその満足をはっきり異性にもとめるようになる。ふつう思春期は結婚によって性的満足がえられることによって終る。だが結婚前であれ後であれ、性的満足がえられないと、いろいろの葛藤がうまれてくる。いや社会的戒律や道徳や良心があるかぎり、リビドーの満足が抑圧されるだろう。そしてこのような「欲

求不満」から神経症がうまれてくる。神経症の症状は、本質上、達せられない性的欲求の代償的満足である、とフロイトは主張するのである。

以上、フロイトのリビドーの「進化」の理論をかんたんに紹介したが、みられるように、フロイトによれば、人間はうまれたときから死ぬときまで、一切リビドーによって支配されている。しかもリビドーは個人のパースナリティを支配し、また神経症をおこす原因であるだけでなく、一切の人間社会をうごかすエネルギーであり、文化をうみだす原動力だとみなされる。芸術や科学のごときも、実はリビドーの変形されたものにすぎない。リビドーにたいして社会的強制がくわえられると、それは一方では神経症などの症状をうみだし、他方では「昇華」して「文化」になる。

「芸術家は、名誉・権力・富・名声・女の愛をかちえたい」というはげしい衝動の欲求に駆られている。しかし芸術家はこの満足をみたく手段をもたない。したがって芸術家は他の不満家と同じく現実から遠ざかって、かれのすべての興味を、かれのリビドーさえをも、神経症への道にも通ずるかれの空想生活での願望形式にゆずりわたすのである。⁽¹⁴⁾

この「心理学者」によると、魯迅の作品も小林多喜二の小説も、すべて性衝動を「昇華」させたものにすぎないし、また一切

の芸術作品も科学上の成果も「神経症」と紙一重のものであることになる。(いや、皮肉にもフロイトの「学説」自体がフロイトの性衝動の「昇華」だということになる。) 上部構造、とくにイデオロギーが経済的土台の上部構造であり、階級的利害を反映したものであることが否定され、すべて動物的な性衝動の「上部構造」だとされるわけである。芸術や科学がリビドーの「昇華」にすぎないとすれば、教育もまたリビドーを適当に制御し、その「爆発」から社会を防禦するものにすぎない。

「社会というものは、性衝動が生殖衝動としてあらわれるときには、この性衝動を制御し、束縛し、社会的指令と同一の個人の意志にしたがわせることを、そのもっとも重大な教育任務とせざるをえない。子供を知的成熟のある段階に達するまで、性衝動の完全な発展を延期させることに社会は利益をかんずる。なぜなら性衝動が完全に破裂すると、実際、教育もおじやんになってしまふからである。そうでなければ衝動はすべての堤防を決潰し、苦勞してつくりあげた文化の創造物を押し流してしまふ。だが衝動を制御する任務はけっして容易でなく、あるばあいにはほとんど成功せず、あるときには十分に成功する。人間社会の動機は根柢においては経済的な動機である。人間社会は、その成員が労働しなくてはかれらを養うに十分な食糧をもっていないから、その成員の人

口を制限し、そのエネルギーを性行為から労働にふりむけなければならぬ。こうして原始時代から今日にいたるまで永遠に生活難がつづいているのである。⁽¹⁵⁾」

ごらんのようにフロイトは、人間社会で生活難がずっとつづいているのは、生産力と生産関係の敵対関係からではなく、人間が性衝動をもっており、それにあまりにも人口が多いからだと言ふマルサス主義のやり口で「説明」し、教育というものはこの性衝動が爆発しないようにせいぜい制御するものだと言張しているのである。

さて、フロイトは一切を性衝動に帰し、リビドーによってすべての現象を「説明」しようとしたのであるから、フロイト主義は「汎性欲論」にすぎないとはっきりいうことができる。だがこれにたいしては、ただちにフロイトとその学派からつぎのような抗弁が申したてられるであろう。精神分析はけっして性衝動ですべてをかたづけられない、性的でない衝動もけっして否定しないのである、と。フロイト自身がこのように抗弁したし、また多くのフロイトの擁護者はこのことにうちにフロイトの「二元論的」「弁証法的」立場を見いだして安堵しているようにみえる。こうしてフロイトはその「二元論」をつぎのように展開する。リビドーを「抑圧」し、または「昇華」させるものがあるとすれば、それはなにか。フロイトはいふ。

「リビドーの流れに反対する力はなにか。……きわめて一般的にいえば、それは性的でない衝動力である。われわれはこの衝動力を『自我衝動』として一まとめにする。……病原的葛藤は、自我衝動と性衝動とのあいだの葛藤である。……葛藤は自我と性欲とのあいだの葛藤である。」⁽¹⁷⁾

では一体、フロイトによれば、この「葛藤」はどのような構造をもっているのか。また「自我」はどのような機能をはたすのか。ここでわれわれは、さきにふれた「無意識」の概念にもう一度もどってこれを検討する必要がある。さきにもかんたんにつれたように、フロイトの主張の第一は、「無意識」の役割の強調であった。ところで無意識的なもの、すべてが、かならずしも性的なものであるわけではない。多くのばあい「自我衝動」ないし自我も無意識であり、また小児期の最後におけるエディプス・コンプレックスの抑圧、いいかえれば両親の権威とこれにたいする恐怖からうまれたとされる「超自我」(良心)も無意識でありうる。こうしてフロイトは、広義の「無意識」概念を区別して、そのうち、自我に知られていない部分を非人称代名詞からとった「エス」(das Es)という名前をつけ、「精神装置」をエス、自我、超自我の三つの領域にわけた。

それでは、エスとはどのような特徴をもっているのか。フロイトはいふ。エスとはわれわれの人格の「暗い部分」である。これ

についてはただだんに「自我」の対立者としてえがくことができるだけである。エスは「渾沌」であり、「にえくりかえる興奮にみちた釜」であり、衝動からくるエネルギーで満たされているが組織をもたず、ただ衝動欲求を「快感原理」にしたがって満足させようとする傾向をもつだけである。エスでは一切の合理的思想法則、とくに矛盾律は通用しない。しかもエスは、善悪も道徳も(18)しらず、空間・時間の観念を超越し、変化をしないのである。だがこのように空間・時間を超越したとされるエスは、どのようにして外界の刺激に応じ、外界の変化にこたえるのか。それは自我をつうじてであるとフロイトはいう。すなわち、かれによれば、ふつう知覚・意識体系とよばれる精神装置の表面にはたらいでいるのが自我であって、自我はこの体系において外界についての知覚を媒介するのである。こうして、自我にとっては外界にたいする関係が決定的となり、自我は、エスの盲目的な「快感原理」にかわって、より多い確実性と成功を保障する「現実原理」をおきかえる。「自我は精神生活において理性と分別を代表するが、エスは無拘束の情欲を代表する」(19)のである。

さて、自我のおこりは知覚体系の経験においてであるから、自我は外界の要求を代弁する運命をもつが、同時にエスの忠実な召使になり、エスと現実のあいだを調節しなければならない。しかもそのうえ、フロイトによれば、超自我(良心)というものがあ(20)り、これが自我をいたるところで監視し、自我に一定の規範をお

しつけ、これにしたがわないときは、「劣等感」と「罪意識」という緊張感情を感じさせて自我に罰を課する。「あわれな自我」は、エスにたいしては神経症の不安、外界にたいしては現実的不安、超自我にたいしては良心の不安をいつも感ぜざるをえないのであって、人々はゆきつくところは神経症におちいらざるをえない(20)というのである。

以上のようにみてくると、フロイト主義は、たしかに「汎性欲論」ではなく、むしろリビドー(エス)と自我と超自我からなる三元論、あるいはリビドー(エス)と自我の二元論であるようにみえる。そして自我(超自我をもふくめて)がリビドー(エス)を制御しているようにみえる。しかし本質上、フロイト主義はやはり「汎性欲論」にすぎないとわたくしはかんがえる。ちょうどデューイでは「知性」が、本能を制御するようにみえて、実は本能に制御される二次的な派生的な存在にすぎなかったように、フロイトの「自我」もエスを制御できるようにみえながら、実はエスに制御され支配されるものにすぎない。なぜならフロイトによれば、「自我はやはりエスの一部分にすぎず」(21)、自我のエネルギーはエスから借りてきたものであり、また自我が一番よく任務をはたすことができるのは、エスの意図をもっともよく見ぬくことができるばあいだけだとされているからである。しかもエスと自我を抑圧した超自我そのものが、実はエディプス・コンプレックスの「相続人」にすぎず、その根源においてエスからうまれたも

のだというのであるから、フロイトが苦勞して形而上学的に分析してみせたエス（リビドー）、自我（意識）、超自我の三つの根本概念は、結局は、最初のエス（リビドー、本能）にまでひきもとされ、要するに本能が一切を決定するとされるわけである。

フロイト主義のもっとも中心的なもっとも重要な概念は「衝動」である。だが一体、この「衝動」はどのような特徴をもっているのか。フロイトはこれをどのように科学的に分析してみせるか。おどろいたことには、フロイトはその理論の礎石になる概念を分析も説明もできない。「われわれは、われわれの研究において一瞬も衝動を無視できないのであるが、しかも衝動を洞察できる確信はすこしもない」⁽²³⁾とかれは告白している。つまり、フロイト主義の中心概念はその創始者にとってさえ「あいまい」で「無規定」でわからないものであるから、この中心概念にもとづくフロイトの全理論の「科学性」はまったくあいまいで保障できないものとならざるをえない。はたせるかな、フロイト自身、「衝動理論はいわばわれわれの神話学であり、衝動は神話的存在者である」⁽²⁴⁾と告白しなければならなかった。

われわれは、以上においてフロイト主義の論理構造にできるだけ忠実にのっとり、これを分析した。「思弁哲学」を批判し、機械論的方法や「自然科学的方法」を一掃したはずのフロイト主義が最後にゆきついたところは、一層独断的な思弁哲学と形而上学であり、機械論であり、そしてついには神話にすぎなかった。こ

の意味で、クリストファー・コードウェルが、フロイトは「心理学の神話時代に生きている」とし、フロイトの根本概念である自我、超自我、エス、エディプス・コンプレックス等々を「ギリシヤのオリムプス山に住んだお天氣の神々」に比したのは、まったく正しかったのである。⁽²⁵⁾

すでにみたように、フロイト心理学の根本的な考えかたは、自我衝動と性衝動の対立であった。いずれにしても、そこでは一切の合理的なものはみとめられず、自我はまったく性衝動に従属するものとみなされていた。しかしとくに後期のフロイトにおいては、この自我衝動と性衝動の対立は、新しい「発展」をとげた。

「われわれは長くはこの立場にとどまらなかった。衝動生活の内部におけるある対立についての予感⁽²⁶⁾は、やがてある他のもっとするどい表現をえた。」いまや、自我衝動と性衝動という二つの衝動ではなくて、「攻撃衝動」と「性衝動」という二つの衝動の対立を仮定した方がより明確であるとフロイトはかんがえる。そして一切の人間行動は、この攻撃衝動と性衝動という二つの衝動によつて「説明」される。人間の本性が善良だというのは悪しき幻想にすぎない。人間というものはもともとこの二つの衝動に駆られており、うまれつきサディストでありマゾヒストであるにすぎない。したがって、人間は、この攻撃衝動が自分にむけられないようにするために、むしろこれをほかのものにむけねばならないとフロイトはいう。「われわれは、自分で自分を破壊しないため

には、つまり自己破壊の傾向から自らを保障するためには、他の物や他人を破壊しなければならない。⁽²⁷⁾ 攻撃衝動はまさに「破壊衝動」である。いやむしろ、生命を破壊し、無機の状態を復活させようとする「死の衝動」である。人間を動かすという「攻撃衝動」と「性衝動」の二大衝動は、実は、「死の衝動」と「生の衝動」の別名にすぎない。しかも生命体はそれ自身の生命を維持するとともに、自分以外のものを破壊するものであるから、「死の衝動」はまさに「殺人衝動」である。「殺人衝動」と「生の衝動」いいかえれば、殺すか殺されるか、これが人間のすべての行動を決定し、人間社会の諸矛盾ないしは葛藤をうみだすエネルギーになっているのである。

このような「衝動理論」はなにをみちびくか。それは社会的抑圧の原因や社会悪の発生を人間の永遠にかわらぬ「殺人衝動」によって合理化し、また戦争の不可避性の弁護にみちびく。なぜならフロイトによれば、「人間の攻撃的傾向を矯正しようとのぞんでもまったく見込がない」⁽²⁸⁾からである。こうして国内的にいえば、「人間が指導者^{フューラー}と従属者^{アフテンゲン}にわかれるのは、人間がうまれつき⁽²⁹⁾のぞくことのできない不平等をもっているため」であり、また国際的にいえば、戦争がおこるのは現代資本主義の基本的経済法則によってでなく、矯正しようのない人間の「殺人衝動」のためである。社会的不平等と抑圧も、また戦争も、すべて人間に固有の衝動、永遠にかわらない衝動によっておこるのであって、資

本主義にたいする批判はまったく無用のものとされてしまう。⁽³⁰⁾ フロイト主義が帝国主義者にとってもっとも都合のいい免罪符になり、今日、アメリカ合衆国で最大の流行をみているのはまったく偶然でないのである。

- 註(1) ジェームス・マーシャル『エネスコにおけるフロイトとヘルクス』、『世界』四八年一月号。
- (2) Alexander Merte, "Freud oder Marx?" *Aufbau*, April, 1954, SS. 329—330.
- (3) Sigmund Freud, "Selbstdarstellung," *Gesammelte Werke*, Bd. XIV, London, 1948, S. 86.
- (4) A. Merte, *op. cit.*, S. 330.
- (5) Freud, *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*, Wien, 1926, S. 13.
- (6) *Ibid.*, S. 14. (7) *Ibid.*, S. 62.
- (8) *Ibid.*, S. 104. (9) *Ibid.*, SS. 14—15.
- (10) 注意ぶかい人は、ここでわれわれのあきらかにしたフロイト主義の「三段階論法」的論理構造が、ウェルズがあきらかにしたプラグマティズムの「三段階論法」的論理構造 (Cf. H. K. Wells, *Pragmatism*, N. Y., 1954, pp. 42—43, 138—140.) とまったく軌を一にしていることに気がつくであろう。しかしこの論理構造は、なにもわたくしが無理やりにあてはめたものではない。それはプラグマティズムやフロイト主義だけでなく、ほとんどあらゆる形態の帝国主義イデオロギーに共通する論理構造なのである。Cf. M. Cornforth, "On Pragmatism," *Science & Society*, Summer, 1955, p. 257.

- (11) Freud, *op. cit.*, S. 15. (21) *Ibid.*, S. 347.
- (13) A. B. Feldman, "Lincoln: The Psychology of a Cult," *Psychoanalysis*, Vol. I, No. 1. (Cf. J. H. Lawson, *Film in the Battle of Ideas*, N. Y., 1953, pp. 59—60); M. Sherif and C. W. Sherif, *Groups in Harmony and Tension*, N. Y., 1953, pp. 38—41.
- (14) Freud, *op. cit.*, S. 390. (15) *Ibid.*, S. 322.
- (16) *Ibid.*, SS. 363—364. (17) *Ibid.*, S. 363.
- (18) Freud, *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, Gesammelte Werke*, Bd. XV, London, 1949, S. 80. 以下 XV. として引用す。
- (19) XV, S. 83. (20) XV, SS. 84—85.
- (21) 拙稿『アメリカ心理学の批判』『社会労働研究』三号、一三九—一四〇ページ。
- (22) XV, S. 83. (23) XV, S. 101. (24) XV, S. 101.
- (25) Christopher Caudwell, *Studies in a Dying Culture*, London, 1951, pp. 158—159.
- (26) XV, S. 109. (27) XV, S. 112.
- (28) Freud, "Warum Krieg?" *Gesammelte Werke*, Bd. XVI, London, 1950, S. 23. 以下 XVI. として引用す。
- (29) XVI, S. 24. (30) このような思想を説教している人に山本和牧師がいる。同氏によれば、今日われわれをおびやかしている原水爆投下の威嚇は、人間が動物以下の「本能」に駆られており、この悪魔的な「原罪」にのろわれているためだというのである。『朝日新聞』五五年五月二十七日。

三、フロイト主義社会心理学の批判

われわれは前章において、フロイト主義の論理構造とその根本概念をかんたんにみた。旧来の思弁哲学と形而上学を「批判」して科学的心理学を建設すると自負した精神分析の理論が、実際は、衝動ないし本能を形而上学的に実体化し、一層おそまつな思弁哲学と生物学主義を導入したこと、「科学的心理学」はおろか、フロイト自身の告白によれば「神話」をしかうちたてることができなかったことはあきらかである。

ところで、フロイトの精神分析の理論は、主として個人の心理と行動の分析である。もちろん、この個人はたんなるアトムとしての個人でなく、まさに社会的個人であり、またそれだからこそ、「抑圧」「エディプス・コンプレックス」「昇華」などの概念が使用されたのであった。しかし、さきにかぎりで、精神分析は個人心理ないし個人的無意識の分析であって、また全面的には社会心理の分析ではなかった。一般に、「社会心理学」というものが、一方では個人の経験と行動に関心をもつとともに、他方では集団関係(group-relation)と文化の影響にも関心をもつとされるかぎり、さきのかんたんな概観だけでは、われわれは、フロイト主義の社会心理学を批判したということにはならないであろう。したがってわれわれはつぎに、フロイト主義の「集団関

係」と「文化」の理論、すなわちいわゆる「集団心理学」を検討し、その社会心理学を批判しなければならぬ。

さきにもみたように、フロイト主義が欧米の思想界に登場したのは、ほゞ一九〇〇年を境として世界資本主義が帝国主義段階にはいったときであった。それは、はじめは主として個人の精神病理の分析にはじまり、またその範囲をこえなかった。しかしとくに第一次世界戦争と十月革命ののち、フロイト主義は「新しい発展」をとげた。一方では「自我衝動」にかわって「破壊衝動」、「殺人衝動」、「死の衝動」の存在が主張され、他方では、大衆闘争を「批判」するために、社会心理学的用語でいえば「集団」あるいは「群集」という現象に注意がむけられ、社会問題・文化問題がフロイトの主要な関心事となった。フロイトの「個人心理学」は、こうして「社会心理学」ないし「集団心理学」に「発展」したのである。かれはのべている。

「個人の精神生活においては、他人は、通常、手本として、対象として、援助者として、また敵対者としてあつかわれる。だから個人心理学は、はじめから同時に、ひろい意味での、しかも正しい意味での社会心理学である。」⁽²⁾

では一体、「社会心理学」（フロイトは自分のそれを「集団心理学」ないし「群集心理学」とよぶ）の課題はなにか。それは、

第一に集団とはなにか、第二に集団はどうして個人の精神生活に決定的な影響をおよぼせるか、第三に集団が個人に強制する心の変化の本質はなにか、これをあきらかにすることだとフロイトはかんがえる。こうしてかれは、「自分自身の心理学にまったく合致する」というル・ボンの『群集心理学』⁽³⁾によりつつ、集団にはいった個人の変化をつぎのように説明するのである。

すなわち、フロイトによれば、無意識が人間の心理を決定するものであり、意識はこの無意識のごく小さな一部分にすぎなかったが、この無意識の理論が、ここでも集団心理の解明のために利用される。つまりル・ボンとフロイトは、個人は集団のなかにはいると、抑制と自制を失って、まったく無意識に支配されるようになるとかんがえ、集団中の個人の特徴は「意識的人格の消失、無意識的人格の優勢、暗示と伝染によって思考と感情が同一の方向をとること、暗示された理念をすぐに実現する傾向である」⁽⁴⁾という。このようにして、個人はもはや自分自身でなくなり、意志をなくした「自動機械」になる。集団は、ただ無意識によってのみみちびかれるにすぎず、衝動に駆られて理性を失い、批判力をなくし、過激になる。人間は個人としては文明人であるが、集団にくわわると野蛮人になってしまう。「たんに組織的な集団にぞくするだけで、人間は文明の階段を数段下りることになる。人間は、一人でいるとおそらく教養ある個人であったかもしれないが、集団にはいると野蛮人、つまり衝動的存在になってし

まう⁽⁵⁾」というのである。

ごらんのように、フロイト主義は人民大衆の組織化をおそれ、非難し、集団をたんなる野蛮人のあつまり、衝動のかたまりだとみなすのである。このような「社会心理学」がどんなに反民主的なイデオロギーであり、ブルジョアジーにとってどんなに都合のいい弁護論であるかを説明する必要があるか。たとえばアメリカのフロイト主義者ジョン・C・ガスティンは、このような「理論」によって一九四九年におこったかのピークスビル事件を「説明」する。この「心理学者」は、ピークスビル事件がおこったのは、アメリカのファシストたちがポール・ロブソンの平和な音楽会を政治的な目的で襲撃したからであること、またこの音楽会に参加していたアメリカの平和愛好者がきわめて組織的に整然とファシストの挑発を撃退したことをかくし、あの事件の原因は、双方の「群集」が「サディスト的衝動と暴力をふるいたいという無意識的欲求」につかれたからだとして「説明」する。悪いのは「強迫観念につかれたアメリカの群集 (the Mass American) の性格構造」であって、「腹黒い利己的な資本家や権力を追求する政治屋ではない」とこの「社会心理学者」はいうのである。⁽⁶⁾

さて、集団は理性をなくし、批判力を欠き、軽信的なものになった。だから集団の信ずるものは権威だけであり、力だけである。いまや「原始時代の遺産」として個人のうちでまどろんでいるあらゆる残酷で血なまぐさい破壊的本能が、衝動の自由な満足を

もとめてめざまされてくる。⁽⁷⁾」そして集団(群集)がその「指導者」に要求するものは強さであり、暴力だけである。またこの「狂暴な」群集を指導できるものは、「主人」であり、「選良^{エリート}」だけである。群集は支配され圧迫されることを欲し、その英雄をおそれている。「群集は主人がいなくては生きてゆけない従順な家畜の群である。群集は、主人だと自称する者ならだれにでも本能的に従属しようという渴望にしたがっている。」⁽⁸⁾

みられるように、フロイトは、一方では、集団あるいは群集を暴力的で非合理的なものとしてえがき、他方では指導者にたいしては本能的に服従する無力なものだといっているのである。「集団」ないしは「群集」をこのように特徴づける社会心理学が、歴史における人民大衆の決定的役割を無視し大衆闘争をゆがめて、ファシズムを弁護していることはいうまでもないだろう。(これについてはのちにみる。)だがともあれ、フロイト主義はこの「集団心理」をどのように理論的に説明しようとするのか。ここでフロイトは、かれが個人心理ないしは神経症の研究のさいに「発見」した得意のリビドーの概念を「社会心理」にも拡大して適用する。かれによれば、集団精神の本質をなすものは「感情の結合」であり、「愛の関係」であり、もつとはっきりいえば性的衝動である。個々ばらばらの個人を結合して集団を形成させるもの、それは「エロス」にほかならない。集団のなかで個人が個性を放棄しているのは、他人と「和合」したいという欲求が個人の

うちにあるからである。かくして、たとえば労働者が共通の目的のため団結して資本家とたたかうばあい、労働者を組織させるものは「リビドー」だと「説明」される。協働がおこなわれるばあいは同僚のあいだにかならずリビドー的結合がつくられるのであって、これがかれらのあいだの結合を利害をこえて永続させ、固定化させる。労働者階級をして団結させるもの、それは資本主義社会そのものの経済法則ではなく、またこの法則を反映した政治的・イデオロギー的闘争でもなくして、「共通の仕事にむすばれている他の男にたいする非性化され昇華された同性愛」⁽⁹⁾にすぎない。「万国の労働者団結せよ！」というばあい、フロイト主義者はこれを労働者相互間の「同性愛」のあらわれだというのである。こうしてフロイトの社会心理学によれば、一切の集団が持続的であるか崩壊するかは、すべて「同性愛」の強弱によって決定される。フロイト自身の「例証」によれば、たとえば第一次世界戦争でドイツ軍が崩壊したのは、ドイツ軍ではリビドーの要求が十分考慮されていなかったからにすぎない。⁽¹⁰⁾この心理学者は、帝国主義諸国間の矛盾とドイツ帝国主義の相対的弱さ、十月革命の勝利とドイツ革命の勃発という真の原因を完全にかくし、一切の社会的・歴史的事件を「性欲」でぬりつぶしてしまうのである。

集団における個人同志間の結合を「同性愛」で「説明」したフロイトは、つぎにこの個々の成員が「同一化」によって「指導者」を求めざるえないと主張する。同一化とは、幼い男の子はエ

ディプス・コンプレックスを経験するまえに父親にたいして特別の関心をあらわし、自分も父親とおなじになりたいとかんがえるという、フロイトの仮説である。⁽¹¹⁾口唇期の男の子は父親を理想とし、自分を父親と同一化する。同様に、リビドーに駆られ理性を失った集団メンバーは、性的な衝動によって指導者をもとめ、指導者と結合しようとする。集団で決定的なもの、それは個々のメンバーが指導者にたいしていなく同一化であり、同性愛である。そしてこの指導者との同性愛の方がメンバー相互間の同性愛よりも集団にとって決定的だと、フロイトはいう。「集団は二種類の感情結合によって支配されているが、このうち、指導者との感情結合の方が……集団中の個人相互間の他の感情結合よりもっと決定的であるようにおもわれる」⁽¹²⁾

こうして、大衆は信頼できない群衆であり、モップであって、これを統制できるものは独得の資格をもった指導者だけであり、選良だけだということになる。だから「集団を平等化せよ」⁽¹³⁾（民主化せよ）という要求は、集団の個人にだけあてはまるのであって、指導者には通用しない。⁽¹³⁾いや反対に、指導者が、選良が、大衆を支配してやらなければならない。「文化の仕事をするためには強制が必要であるのと同様に、少数者による大衆の支配をやらなすことです」とはできない。なぜなら、大衆は怠けもので理解力がわるいからだ。⁽¹⁴⁾とこの社会心理学者はいうのである。

このような「社会心理学」がどのような社会的意味をもつかに

ついて説明する必要があるか。それはまさにファシズムの社会心理学であり、ファシズムの弁護論である。「指導者」なるヒトラー、「統領」なるムッソリーニは、まったくその責任を免除され、わるいのはすべて「指導者」をもとめ、「権威」にあこがれ、服従することをのぞんだ「群集」、性衝動につかれた「群集」だけだということになる。

さて、集団は個人間の「同性愛」によって形成され、また指導者をもとめ、かれと「同一化」する性的欲求によって統合されていた。群集というものはもともとマゾヒスト的だとされた。だがまさにそれだからこそ、その個人にとっては隣人は性的対象になるだけでなく、サディスト的な誘惑をおこせるとフロイトはかえりえる。「その隣人にたいして攻撃をくわえて満足し、その労働力を補償もしないで搾取し、その隣人を同意もえないで性的に使用し、そのもちものを掠奪し、かれをばづかしめ、苦痛をあたえ、拷問にかけ、殺してしまおうという誘惑」がうまれてくる。

「人間は人間にたいして狼である。」(Homo homini lupus.)⁽¹⁵⁾みられるようにフロイトは、ファシズムがドイツで支配しようとした一九三〇年に絶対主義のイデオログ、ホッブスの思想を復活させ、人間のいかんともしがたい「本能」という理論によってファシズムを擁護したのである。いまや一切を決定するものは、暴力であり、暴力だけである。「正義とは、もともと残酷な暴力であったし、今日でも暴力による支持を欠くことのできないものであ

る。」⁽¹⁷⁾力は正義なり。こういってフロイトは、暴力万能の立場でファシズムの確立を主張する。

「共同体は永遠に維持され、組織されねばならず、おそれべき「人民の」反抗をふせぐ指令をつくり、この指令すなわち法律の履行をみまもり合法的暴力行為の実行に配慮する機関をきめなければならない。」⁽¹⁸⁾

ごらんのように、国内的には「共同体」理論を弁護してファシズムの実現を説くフロイト主義は、国際的には、人種主義とくに反ユダヤ主義の「必然性」を「心理学的」に説明し、マルサス主義を弁護し、さらに戦争とコスモポリタニズムを説教する。⁽²⁰⁾

「戦争は待望される『永遠』平和をもたらすためにけつして不適当な手段ではない。なぜなら戦争は、強力な中心的暴力によってそれ以後の戦争を不可能にする大きな統一体をつくることができるからである。」⁽²¹⁾

フロイトは、一方ではソ同盟における社会主義建設を敵視し、私有財産を廃止しても人間の「所有本能」「攻撃衝動」はなくなりから共産主義は失敗すると「予言」したが、他方では当時アメリカ・イギリス帝国主義の道具であった「国際連盟」を弁護

し、その決定を世界的に強制できる「中心的暴力」を「国際連盟」にあたえることを訴えたのである。⁽²³⁾

かくしてフロイト主義は、ファシズムと戦争を弁護する「心理学」ないし「社会心理学」である。皮肉にも、ヒットラーはフロイトを「追放」し、その性科学書を焚書にした。しかしこれは、ファシズムがフロイトの理論内容に反対したとか、またフロイト主義が反ファシシヨ的で科学的であったとかいうことをすこしも証明しない。反対にそれは、現代帝国主義イデオロギーの矛盾とアナキーを証明するにすぎない。現代アメリカの代表的社会心理学者シェリフ夫妻自身も、フロイト主義がファシズムと戦争の社会心理学になることをみとめないわけにはゆかなかった。⁽²⁴⁾

ところで、ヒットラーに「追放」されながら、実はヒットラーの「指導者原理」を基礎づけていたフロイト主義者は、その後、ロンドンとアメリカに移住し、とくに後者において「安住の地」をみいだしたようにみえる。フロイトはかいている。「われわれは……『群衆の心理的貧困』(das psychologische Elend der Masse)と名づけることのできる危険におびやかされている。社会的結合が主として群衆のメンバー相互間の同一化によってつくりだされているのに、指導者の個性が集団形成のさいに当然にならうべき意義をもたないばあい、この危険がもっともよくおそってくる。アメリカの今日(一九三〇年)の文化状態は、文化のおそるべき害悪を研究するよい機会を提供するであらう。」⁽²⁵⁾

『文化における不満』の初版がでた年、すなわち一九三〇年といえ、一九二九年にはじまる大恐慌のもとで、はげしい弾圧にもかかわらず、アメリカの労働者階級の全国的大闘争がおこなわれた年であった。⁽²⁶⁾しかし、アメリカの労働者階級が、フロイト的用語をつかえば「社会的結合」をつくりだし団結をかためていたのに、アメリカ・ブルジョアジーの「指導者の個性」は労働者階級という「群衆」にたいして「当然およぼすべき」影響をもつほどもまだ準備できていなかった。当時、合衆国では労働者階級はあまりにもつよく、ファシストはまだ十分大きな勢力になっていなかったからである。ところが、フロイトは、このような状態をこそ、「群衆の心理的貧困」とよび、「危険」だとかんがえ、「アメリカ文化のおそるべき害悪」だとみなしたのだ。つまりフロイトは、この「群衆」の「危険」を克服するために、アメリカで「指導者の個性」(すなわちカフリン神父やヒューイ・ロングのようなアメリカ・ファシストの個性)が支配的になることを期待したのである。

そして全般的危機の第二段階とともに、世界ファシズムの中心が合衆国にうつった今日、合衆国ではフロイトの期待したとおり、マッカーシーという「指導者の個性」が出現し、またマッカーシー個人は最近没落しつつあるとはいえ、マッカーシーズムはやはり大きな勢力を維持している。今日生きておれば、フロイトは、マッカーシーがアメリカを「群衆の心理的貧困」という「危

「除」からすくい、「アメリカ文化のおそろべき害悪」を「一掃」してくれたといつて絶讃するにちがいない。

かつてファシズムに「反対」したデューイのプラグマディズムが皮肉にもマッカーシーズムの哲学になったように、ヒットラーに「追放」されたフロイトの社会心理学は、マッカーシーズムの社会心理学になる。フロイト主義が現代アメリカにおける「選良」の理論、「リーダーシップ」の理論の基礎となったのはまったく不思議ではなく、また人民大衆を「モップ」としてえがくホリウッド映画（たとえば『革命児サパタ』、『零号作戦』、『嵐を呼ぶ太鼓』、『激怒』、『井戸』などをみよ）の心理学的背景になったのはけっして偶然でない。フロイトの「心理学的貧困」（das psychologische Elend）をいれはさへつきりさせるものがあつたか。

註(一) J. H. Rohrer and M. Sherif, ed., *Social Psychology at the Crossroads*, p. vii.

(二) Freud, "Massenpsychologie und Ich-analyse," *Gesammelte Schriften*, Bd. VI, Wien, 1925, S. 261. 以下 VI として引用す。

(三) Gustave Le Bon, *Psychologie des Foules*, Paris, 1895.

(四) VI, S. 269. (五) VI, SS. 269—270.

(六) J. C. Gustin, "The Great American Neurosis," *Psychoanalysis*, Vol. I, No. I. (Lawson, *op. cit.*, pp. 57—58 による。) わが国でこれと似たような「社会心理学」を説く人に宮城音彌氏がある。宮城音彌『群衆の心理学』、『革命の心理学』（『社会心理学ノート』所収）参照。

(7) VI, S. 272. (8) VI, S. 274. (9) VI, S. 301. (10) VI, S. 291. (11) VI, S. 303.; XV, S. 69. (12) VI, S. 297. (13) VI, S. 323. (14) Freud, "Die Zukunft einer Illusion," *Gesammelte Werke*, Bd. XIV, S. 328.

(15) Freud, "Das Unbehagen in der Kultur," *Gesammelte Werke*, Bd. XIV, SS. 470—471. 以下 XIV として引用。 (16) Judd Marmor, "Psychoanalysis," *Philosophy for the Future*, ed. by R. W. Sellars and et al., N. Y., 1949, pp. 327—328.

(17) XVI, SS. 19—20. (18) XVI, SS. 15—16. (19) XIV, SS. 473—474.; VI, S. 299. (20) XVI, S. 26. (21) XVI, S. 18. (22) XIV, S. 473.; XV, SS. 195—197. (23) XVI, S. 18.

(24) M. Sherif and C. W. Sherif, *op. cit.*, pp. 33—35. Cf. Caudwell, *op. cit.*, pp. 181, 189.; V. Kolbanovskii, «Pour une Interpretation marxiste des Problèmes de Psychologie», *La Psychiatrie Soviétique*, par John Wortis, Paris, 1953, Appendices, p. 334.

(25) XIV, S. 475.

(26) W. Z. Foster, *History of the Communist Party of the United States*, N. Y., 1952, pp. 281 ff.

(27) くわしくは拙稿『プラグマティズムの批判』、『ファン・ス・レーニン主義研究』六号。

(28) 今日合衆国では人々を少数の有能な「選良」と大多数の無能な「群衆」に分類し、一切の政治的・社会的現象を「選

「良」によつてのみ「説明」しようという「理論」が流行している。その代表者はすでに死んだ「亡命」学者をもふくめると、J・シュンペター、エミール・レーデラー、F・ボルケナウなどのほか、ジェームス・バーナム、A・M・シユレジンガー二世、W・リップマン、ならびにH・D・ラスウェルなどである。(Cf. Raymond Barkley, "The Theory of the Elite and the Mythology of Power," *Science & Society*, Spring, 1955.) このうちもつとも代表的なのは、わが国の政治学界にも影響をおよぼしているラスウェルであるが、かれの理論は、われわれが本文でみたフロイト主義の精神分析の方法や「選良」の理論を政治学に利用したものにはすぎない。政治学の研究は「勢力」と「勢力者」の研究である。「勢力者」とは一番もうける者であり、一番もうける者が「選良」、そしてこのこりは「群集」である。そして一切の政治的分析は「選良の特徴」ないしは習性の研究にかんにかかっているというのがかれの主張である。(Cf. *The Political Writings of H. D. Lasswell*, III, 1951, pp. 295, 443.) われわれは別の機会にアメリカ・フアシズムに奉仕するこの「近代政治学」のフロイト版をくわしく批判する必要がある。尙このような「選良」の理論や「リーダーシップ」の理論がアメリカ軍部の作戦活動本部(O・S・S)や諜報作戦に利用され、その「軍事科学」の重要な一部になっていることも忘れてはならない。(Cf. M. Sherif and C. W. Sherif, *op. cit.*, pp. 41—48.; S. S. Sar-gent, *op. cit.*, pp. 304—305.; E. G. Broing, *op. cit.*, pp. 410—424.) この「リーダーシップ」の理論は自衛隊の作戦計画にさえ利用されている。『朝日新聞』五五年一〇月

一五日をみよ。

(29) Lawson, *op. cit.*, pp. 50—57.

四、フロイト主義とマルクス主義

精神分析は、唯物論心理学にとって学ぶべきものをもっているか。フロイト主義は、マルクス主義がとりいれるべきものをもっているか。

すでにみたように、フロイト主義は心理学に「革命」をおこしたかのようにみえた。それは、意識、感覚、知覚等の「古い」心理学的概念を排除し、かわりに無意識、衝動、本能という「新しい」概念をとりいれた。たしかに意識や知覚という概念よりもっと具体的・唯物論的にみえる本能・衝動という概念をとりいれることによつて、また「決定論」を主張することによつて、フロイト主義は、旧来の心理学よりもより具体的・唯物論的になったようにみえる。すくなくならぬ「マルクス主義者」はこの点に幻惑されて、フロイト主義を唯物論的心理学と名づけ、マルクス主義はこれを摂取すべきだと説いた。⁽¹⁾しかし実際のところ、フロイトのいう無意識や衝動の概念あるいは「心理的決定論」は、「心理的現象の物質的基体——神經過程」⁽²⁾とは縁もゆかりもない。精神分析学者は、大脳皮質の生理学を完全に無視する。衝動の「源泉は身体内部の興奮状態であり、その目的はこの興奮の解消であつて、⁽³⁾衝動は源泉から目的への途上で心理作用をおこす」とフロイトは

いう。だがこの「源泉」そのものは一体なにかから生まれたのか。フロイトはこれに答えることができず、いや自問自答さえしない。フロイト主義は唯物論的にみえるけれども、本当は観念論にすぎない。「われわれは、」われわれの哲学が物活論的^{アイニステイツシュ}の考えかたの本質的特徴を保持してきたこと、……世界における現実の出来事はわれわれの思考が指定する道を歩むという信仰を否定することができない。⁽⁴⁾みられるように、フロイト主義は主観的観念論であり、しかもそのうちでも一番おそまつな物活論であり、生気論であり、エンテレヒー説にすぎない。

フロイト主義は弁証的だという主張がある。たしかにフロイトは、旧来の心理学の静的な考えかたを排除して意識の「深層」にふみいり、これをダイナミックに、力学的に説明したようにみえる。また無意識と意識、生衝動と死の衝動、快楽原理と現実原理のあいだの「葛藤」「闘争」を強調し、心理現象を「弁証法的」に「矛盾」としてとらえたようにみえる。若干の「マルクス主義者」はこの点に眼をうばわれて、フロイト主義を弁証法的心理学だと名づけ、マルクス主義はこれから学ぶべきだと主張した。⁽⁵⁾しかし実際のところ、フロイトの「無意識」の概念は、⁽⁶⁾けっして「意識」との弁証法的統一の関係においてとらえられているのではなく、それ自体形而上学的に実体化されている。なぜなら、かれによれば「無意識」は時間・空間を超越し、発展をもたず、永遠に「原始性」をもっているとされたからである。「永遠」の生衝

動や殺人衝動などの概念にいたっては、これがいかに形而上学的な虚構にすぎないかはすでにあきらかにしたところである。

フロイト主義は、旧態依然たる封建的偽善と俗物主義に打撃をあたえ、性を解放し、新しいモラルをつくったという主張がある。こうして一部の「マルクス主義者」はフロイトに進歩的な意義をみとめようとしたし、⁽⁷⁾また一時、ソ同盟でもフロイトが新しい性モラルの鼓吹者として流行したことがあった。たしかにフロイトは、封建的な「女大学」的な偽善をばくろし、古い俗物主義に打撃をあたえたようにみえる。しかしフロイトの本を自分でよむ人は誰でも事実はまったく反対であることをみいだすだろう。フロイトによれば、女性が男性よりも「見栄ばり」で「羞恥心」と「嫉妬」がつよいのは、女性がペニスをもたないからである。⁽⁸⁾女性というものは、すべて「ペニス羨望」という心理に駆られている。そしてこの心理が、一切の女性心理と女性の社会的地位と「知的無能力」(?)を説明するとフロイトは主張する。「婦人の社会的関心は男性のそれよりも弱く、婦人の衝動昇華〔文化創造〕の能力は男性のそれよりもすくない。」⁽⁹⁾ごらんのように、フロイト主義は男女の社会的不平等が階級社会においてのみうまれ、⁽¹⁰⁾ることをかくし、女性を永遠に劣等でいやしいものとみなす。女流精神分析学者ヘレーネ・ドイッチュによれば、マゾヒズムは女性の精神生活の根本をなすものであり、女性は本質上、強姦をのぞみ、屈辱を欲するものにすぎない。一点の疑いもなく、フロイ

ト主義は、封建的俗物主義に打撃をあたえるどころか、反対にこれをもっと動物的にし赤裸々にしたファシスト的女性観である。それは、変態的ブルジョア文化の完全な墮落のあらわれであり、破産である。それは、労働者階級にとって学ぶべき進歩的なイデオロギーではなく、むしろ積極的に批判しなければ自分自身が墮落させられてしまう有害なイデオロギーである。レーニンはいっている。

「フロイトの仮説の敷衍は『学がありそうに』、科学的らしくさえみえるが、それは浅薄で粗雑なものです。フロイト理論はモダンな流行だ。わたくしは、論文、論説、パンフレット等々の性の理論、つまりブルジョア社会の泥沼に押し上げるこの種の文献の性理論は信用しない。インドの聖者が自分のへそばかりながめているように、いつも性問題ばかりながめている人々を、わたくしは信用しません。わたくしの考えでは、大部分が仮説で、ときにはまったく勝手な仮説にすぎないこうした性理論の繁昌は、個人的な必要から、つまり自分の変態的性生活ないしは過度の性生活をブルジョア道徳にたいして弁護し、それを勘弁してもらおうとする必要からうまれたものです。ブルジョア道徳にたいするこの仮面をかぶった敵意は、性的な事からのせんさく好きと同じく、わたくしにはにがにがしいことだ。どんなに勇ましく革命的な

身ぶりをしようとも、結局それはまったくブルジョア的なものです。それはとくにインテリゲンツィアやそれに近い層の道楽です。わが党のなかには、階級意識ある戦闘的プロレタリアートのあいだには、そういうものための席はありません。⁽¹¹⁾」

アメリカ帝国主義は、今日、自国の勤労者階級ならびに植民地・従属国の諸民族を弾圧するために、一方ではありとあらゆる暴力をふるい、武力を行使しつつ、他方では、被抑圧人民を内側から墮落させるためにフロイト主義を最大限に宣伝している。たとえば、五四年九月、アメリカの鉄道友愛会の機関誌『レーバー』紙は、アメリカの「心理学者」たちが、資本家の指図で組合員の「性生活」を調査し、これにもとづいて「生産性向上」をすすめ、また首切りや新規採用を決定していると非難した。⁽¹²⁾フロイト主義は、今日、ハリウッド映画の女性観のイデオロギー的背景となり、『女群西へ行く』、『イザのすべて』、『欲望という名の電車』その他をみよ、⁽¹³⁾また従属下の日本で汎濫するありとあらゆる「性科学書」の「科学的」(?)基礎になっている。「科学」を売りものにする『キンゼー報告』のごときも、フロイト主義心理学にもとづく「実証的研究」(?)以外のなにものでもない。⁽¹⁴⁾フロイト主義は、帝国主義の没落の必然的法則をあきらかにする社会科学に反対し、これを、人間の「性行為」を社会の中心におく「性

の「社会心理学」ないし「性の社会学」でとりかえることを主張する。フロイト主義は、まさにアメリカ帝国主義の三S政策に御奉公する「心理学」にほかならないのである。

われわれは以上において、フロイト主義の反科学性と反動性をくりかえしあきらかにした。だがそれにもかかわらず、つぎのような反問が提出されるであろう。フロイト主義の「体系」が反科学的であることはひとめするにしても、フロイトの精神分析療法という「テクニック」(術式)にかんするかぎり、それはやはり価値あるものではないか。精神分析療法は、実際に神経症患者を治療しているのではないか、と。このように、フロイト主義の「体系」と「テクニック」をきりはなし、「役にたつから」という理由で「テクニック」だけを擁護しようというプラグマティックな論法が、フロイト主義を弁護する最後の論拠になっているのである。⁽¹⁵⁾

では精神分析療法とはどういうものか。フロイトはいう。「ある症状にぶつかるときにはいつでも、われわれは、その患者には、まさしく症状の意味をふくんでいるある無意識な過程が存在していると推定することができる。しかしこの症状の意味が無意識であつてこそ、はじめて症状がおこるのである。意識的な過程からは症状は形成されない。この無意識が意識されるとすぐ症状は消えるにちがいないのである。」⁽¹⁶⁾ いいかえれば、「精神分析療法の任務は、あらゆる病原的な無意識を意識に転化するという公

式に要約できる」というのである。⁽¹⁷⁾

たとえば、ある強迫神経症の若い女患者がいる。この患者は毎夜就寝前にある一定の型の行為(就寝儀礼)を強迫観念にかられてやらなければ就寝できなくなっている。一体どうしてこういう行為をやらざるをえないのか。フロイトによれば、それは患者自身には意識されていないある無意識的過程がはたらいているからである。そしてこの無意識的過程を患者自身に意識化させることができる。そしてこの神経症はなくなるという。それではどのようにこの患者の無意識を意識に転化させるのか。それは「自由連想」によつてである。精神分析医は患者にたいし、あらゆる意識的反省をすてて自発的な精神的継起にしたがうて思いうかんだことはどんなことでも分析医に告げるよう説得する。だが無意識はなかなか意識化されず、患者はけつして無意識(それは例外なく抑圧された性的欲求だそうである)を分析医につげないだろう。なぜなら、自我の力がこの無意識を抑圧し、「抵抗」がはたらくからである。こうしていまや患者と医者とのあいだに「決戦」が開始される。分析医は患者の「抑圧」をさがしだし、「抵抗」を発見し、「抑圧」されたものをほのめかしてやることによつて、「抵抗」を克服する。⁽¹⁸⁾ そしてこのためには、分析医は、一方では、職業問題、商売、結婚、離婚などその他人生問題・社会問題はすべて治療期間中はさしひかえるよう患者に命令して、⁽¹⁹⁾ 患者を社会的環境からまったくきりはなし、孤立させるとともに、他方では、

患者を「幻惑」し、「威嚇」し、激しく「叱責」しなければなら
ない。⁽²⁰⁾ 患者の世界を患者と分析医のあいだだけに極限し、その結
果、「転移」という現象をおこさせる。患者は、いままでリビド
ーを症状にむけていたが、「転移」がおこって、リビドーを分析
医にむけ、分析医に「愛情」をうつしかえるようになる。こうな
ればしめたものだ。フロイトはいう。「転移は、医者を權威の衣
でつつみ、医者の報告と見解にたいする信仰にかわる。」⁽²¹⁾ そして、
この「転移」を「治療の最良の武器」として患者を暗示すれば、
患者の抑圧された無意識の性衝動（さきの女患者のばあいなら、
彼女の父にたいする愛着と母にたいする敵意、すなわち「エレク
トラ・コンプレックス」）が意識化されるようになり、強迫神経
症はなおるといのである。

では、このような「テクニク」としての「精神分析療法」
は、マルクス主義心理学ないしは精神医学も学ぶべき貴重な「テ
クニク」であり、本当に効果があるのだろうか。わたくしはま
ったく反対であるとかんがえる。

第一に、精神分析の「テクニク」をその「体系」からきりは
なすこと自体がまちがっている。精神分析を「テクニク」だけ
に、ないしは「方法」だけに制限しようということなら、すでに
フロイト自身主張したところではなかったか。⁽²²⁾ それに、「テクニ
ク」はフロイト主義の根本概念である「無意識」、「衝動」、「抑
圧」、「自由連想」、「抵抗」等を排除するどころか、これらを前提

としている。しかもこのような根本概念がすこしも科学的でな
く、神話にすぎないことはさきにしめしたとおりである。フロイ
ト主義の「体系」が科学的でないからこそ、その「療法」も科学
的でありえないのである。

だから第二に、精神分析療法は、神経症ないし精神病をなおす
ことができない。実際、「神経症や精神病は脳の正常な生理学的
特性が弱まったり、なくなったりすること、あるいは脳が多かれ
少なかれ破壊されたこととむすびついていること」⁽²³⁾ を無視して、
どうして患者をなおすことができるか。また神経症や精神病は、
このような生理的条件とともに、社会的・階級的条件（戦争、失
業等の不安と恐怖その他）によって促進されるのに、患者を社会
から隔離し、社会問題を現実的に処理できないようにさせて、ど
うして治療することができ得るであろうか。かりに「治療」され
ても、その患者は社会の荒波につきだされると、すぐにまたノイロ
ーゼを再発するであろう。

はたせるかな、精神分析療法が実際はまったく無力であること
は、フロイト自身がみとめざるをえなかったのだ。なぜなら、フ
ロイト自身、精神分析のききめのあるのは、恐怖症、ヒステリ
ー、強迫性神経症、感情転移症だけであって、外傷性神経症やナ
ルシズム神経症は治療できず、まして精神病（フロイトは神経
症と精神病を機械的に区別する）は全然なおせないと告白してい
るからである。⁽²⁴⁾ しかも、「ききめがある」とされた神経症につい

でも、実際どれくらいなおったのかどうかまತ್ತたくうたがわしい。たとえば現代アメリカの精神分析の大家、オットー・フェニケル博士に精神分析療法の「成果」をきいてみよう。フェニケルはその大著『神経症の精神分析理論』で、「精神分析の療法上の成果の統計」という一節をもうけている。ではどれくらいの神経症患者が精神分析療法でなおったのか。フェニケルはこたえていう、「その統計をだすのはむづかしい」と。というのは、どの症例をふくめるかで統計もちがってくるし、「治癒」と「良好」の区別がまちまちだし、「健康」と「正常」も正確に定義できないからである。このように言を左右にして、フェニケルは精神分析療法による治療の「成果」をなかなか教えてくれない。いや結局、この精神分析の大家は、何パーセントの患者がなおったかさえ、いうことができないのだ。おそらく、あまりに貧弱な「成果」なのではずかしかつたのだろう。ただ「疑いもなく——」とこの大家はいう——精神分析療法にはもともと望まれねばならないことが沢山ある。」ともかく、精神分析は神経症をなおす「最良の方法」なのだそうだが、「その主な欠点は、時間と金を沢山浪費しなければならない」ことである！⁽²⁵⁾ フェニケル博士はまことに「正直」である。精神分析でなおしてもらいたかったら時間と金が必要だ、とこの「大家」は大道商人のように宣言しているのである。

こうして、精神分析療法で神経症がなおるといふ主張は完全な

詭弁である。なぜなら、精神分析医によれば、神経症がなおらないのは、けっして精神分析療法の欠陥のためでなく、患者が分析医を信ぜず、「自由連想」をしにくれず、「転移」して（すなわち分析医を愛して）くれなかったからである。もし患者が分析医をもっと信じていたら、かれはなおつただろうとフロイトは主張する。したがってフロイト主義は、まさに新興宗教の「論理」で自分の存在を合理づける。信者がなおらないのは信仰心がまだ弱いからだという論法と同じく、精神分析でなおらない連中や精神分析を批判する連中は、信仰心が弱く、「偏執病患者」⁽²⁶⁾ なのだと、フロイト主義者はいうのである。

だがどんなに精神分析を「信じ」ても、またどんなに「金と時間」があつても、精神分析療法では神経症はなおらないだろう。いや、一生涯なおせない患者もいるからこそ、フロイトはつぎのようにいう。

「全生涯をつうじて分析のお世話になり、時々またもや分析をうけねばならぬ重大な不利益をうけている人もいるのであるが、しかしこの人々はもしそうしなかったらそもそも生存できないのであつて、この断片的な分析医まかせの治療でかれらをささえることができるのを喜ばなくてはならない。」⁽²⁷⁾

またもや新興宗教の「論理」である。信者がなおらないことも

あるが、なおらなくてもともかく信者を「ささえることができる」のだから喜ばなくてはなりません！ 新興宗教と精神分析療法の相違といえば、後者の方がいくらか「科学的」偽装をつけており、それに患者に時間を浪費させ、金をもっとうまくまきあげるだけである。

こうして第三に、フロイトの精神分析療法は、神経症をなおさないだけでなく、むしろ反対に神経症をもっとひどくし、患者を新興宗教と神秘主義と蒙昧主義にみちびき、さらには金もうけの「テクニク」ないしは「イデオロギー」になる。少々長くなるがさきにあげたフェニケル博士自身に語らしめよう。

「もし患者が『よい子』であって神経症的にふるまわないなら、患者は全能の分析医から愛と保護と『協力』をうるであらう。もし患者が服従しないなら、かれは分析医の復讐をおそれねばならない。この意味で、精神病医はいい商売である。かれは、神と同じ手段をつかって影響力をおよぼすのだ。そしてこの種の精神病医は実際、神にちかい。一般に医学、特殊的には精神療法は、ながいあいだ僧侶の領分であった。そしてしばしば、今日もそうである。……精神病医は、自分は魔法の力をもっており、さらにかつての僧職の医師と同様に神の代表者だという印象をあたえなければならぬ。この印象をあたえることに成功すればするほど、かれの患者

は、ますます魔法的な助けをもとめるものである。信仰し服従すればその報償として健康と魔法的保護をあたえると約束するキリスト教の科学(?)や機関や宗派は、……多くの科学者よりも、もっとよくもつとはやく治療することができる。

……

多くの現代の患者にとっては、魔法はかならずしも大きな設備であらわされるわけではない。むしろ魔法は、権威をもった人々に近づきたいことのうちにあらわされている。しかし、すばらしい魔法をかけるのに遠い昔につかわれたすべての道具や古代の信仰の魔法力の重要さも過少評価されてはならない。⁽²⁶⁾

ジェームスとデューイのプラグマティズムのゆきつくところは、心霊術と神政政治の復活であつたが、同様に、フロイト主義のゆきつくところは魔法と心霊術の復活である。いまや、ありとあらゆる神秘的なものが精神分析のうちに導入され、また、前者は後者によって「科学的」に「証明」される。フロイト自身が、奇蹟、予言、幽霊の存在を「証明」し、また占星術と手蹟鑑定術、精神感应、思想転移、霊波等々、要するにありとあらゆる⁽²⁹⁾ばけもの、と神秘主義を承認しているのである。⁽³⁰⁾ブルジョア心理学の破産をこれほどあきらかにするものがあるか。かくしてロック⁽³¹⁾フェラー財団が精神分析の研究に老大な資本をそそぎこみ、また

今日、ありとあらゆる新興宗教がそろいもそろってフロイト主義にその「理論的支柱」(?)をもとめているのはすこしも不思議ではない。そしてわが国では、いま、『フロイト選集』をはじめ、いろいろの精神分析の書物が、谷口雅春の日本教文社から続々と刊行されているのである。

それでは一体われわれは、どのようにすれば神経症をなおすことができるか。まえにものべたように、フロイトがその「新しい」理論をひっさげて登場したのは、前世紀後半における心理学ないし精神医学の不毛と混乱とからであった。かれは、「古い」心理学ないし精神医学を攻撃し、「新しい」理論を提唱したが、これは実は「古い」心理学の「新しい」形での復活であり、より一層の俗流化にすぎなかった。しかしわれわれは、同じ時期に、まったく別の方向から、この古い心理学ないし精神医学を本当に克服し、真に科学的な新しい心理学ないし精神医学を建設した人を知っている。そしてこの人こそ、イワン・ペトロヴィッチ・パヴロフにほかならない。一九五〇年六月二八日から七月四日にかけて、ソ同盟でパヴロフ学説にかんする歴史的な「科学会議」が開催されたが、この席上、カ・エム・ブリコフはつぎのように発言している。

「パヴロフの業績が生理学にたいして一つの寄与をしたと

か一章をつけくわえたにすぎないという考えは、まちがっている。あらゆる生理学を二つの段階、すなわちパヴロフ以前の段階とパヴロフ的段階にわけた方がはるかに正確である。心理学の歴史も同様にわけることができる。パヴロフ以前の心理学は観念論的世界観にもとづいており、パヴロフの心理学は本質的に唯物論的である。⁽³³⁾」

わたくしはこの評価はまったく正しいと考える。われわれは、このパヴロフ心理学にもとづいてはじめて、フロイト主義を積極的に実践的に批判することができる。パヴロフ心理学ないし精神医学の神経症にたいする立場はどのように特徴づけられるか。

パヴロフ理論の第一の功績は、神経症ならびに心理的諸現象にたいし「純粹に心理学的」にアプローチしたフロイト主義とは反対に、「心理的現象の物質的基体——神経過程」を自然科学的に研究し、実験的・客観的方法によってこれを解明したことである。パヴロフは、条件反射理論にもとづいて、興奮過程と制止過程を衝突させたり、あるいは超強度のいつも遭遇しないような強い刺激をあたえることによって、大に実験的に神経症をおこさせることができた。そしてかれは、たとえばフロイトのある意味での先駆者であったピエール・ジャネが「説明」した「収用感情」ないし「被害妄想」という同じ事実をとりあげ、主観的なジャネとはちがって、これをまったく実験的に説明することができた。⁽³⁴⁾ 実験

的にいろいろの型の神経症ないしは精神病をつくりあげることができるといふことは、これを実験的になくすることができるとを意味する。フロイトの精神分析療法は空想の世界の神話であったが、パヴロフの実験神経症の理論は、実践によって検証された科学であり、また事実、神経症や精神病をなおすことができた⁽³⁵⁾。

パヴロフ理論の第二の功績は、神経症を生理学的な土台にもとづいて把握し治療しようとしただけでなく、第二次信号系の概念を導入するとともに、これを社会的な側面からも把握しようとしたことである。精神分析医は患者に「命令」し、「叱責」し、患者の「神」にさえなったが、パヴロフは、生きた社会的人間をあつかっていることを一時も忘れず、患者にたいしてきわめて丁寧・親切であった。臨床でみる症状と実験室で観察される高次神経活動の異常を比較しつつ、パヴロフは、患者の高次神経活動の特殊性とともに、かれの社会的環境に注意した。イワノフ・スモレンスキーは、さきにふれた「科学会議」でつぎのようにのべている。

「パヴロフは、患者の社会的諸条件や家族の状態、商売や職業の特性とかれの社会的地位、患者をそだて教育した諸条件、患者の過去の生活、患者が以前にかかった身体や神経の病気、情緒的ショックや精神的外傷や患者の経験した葛藤の状態などに、大きな注意をはらった。一言でいえば、患者の

高次神経活動をつくりだし形成した社会的諸条件と社会的諸関係にするといふ関心をしめした⁽³⁶⁾」のである。

厳密な生理学的方法によって異常心理の物質的基体をあきらかにするとともに、このように社会科学に裏づけられた社会的なヒューマニズム的な観点にもとづいて、われわれははじめて、神経症ないしは精神病を根本的に治療できるし、またソ同盟では治療しているのである。

最近わが国で、「ノイローゼの流行」ということがさかんにジャーナリズムによってとりあげられている。では本当に「ノイローゼが流行」しているのか。おそらくは、実際、ノイローゼの患者は以前よりもはるかに多くなっているのだろう。なぜなら、ありとあらゆる資本主義社会の矛盾、恐慌、零落、失業の不安、植民地的抑圧、戦争宣伝等々がますます激化し、これらが、すさまじい刺戟を日本国民にあたえ、とくに弱い神経系を有する人々に障害をおこさせるからである。強い神経系をもっている人でも、基地周辺で年中爆音という過度の刺戟にさらされておれば、自然にノイローゼにならざるをえないだろう。しかし、「ノイローゼの流行」ということをジャーナリズムがとりあげるのには、もう一つの裏面がある。それは、現代は「ノイローゼの時代」で、「狂気の時代」だ、だから「日本人は信用できない」というイデオロギー^{イデオロギイ}・宣伝である。「日本人は緊張民族である^{テンション}」とさかんに宣伝さ

れている。⁽³⁷⁾そしてこのようなイデオロギー攻勢と表裏をなして、フロイト主義が宣伝されている。手もとにある週間雑誌誌上のノイローゼ論議をめぐってみれば、人々はそこにほとんど例外なく、フロイト主義の宣伝をみいだすことができるだろう。しかしはっきりさせておかねばならないのは、「ノイローゼが流行する」のは、けっしてフロイト主義の正当性を証明するものではなく、反対に没落する資本主義社会の矛盾とフロイト主義の破産を証明しているにすぎないことである。例をあげてみよう。たとえば、合衆国では、病院の総ベッド数、一四二万三、五二〇床（一九四八年の数字）のうち、実に四九％は精神病患者用にあてられているが、ソ同盟では、病院の総ベッド数、一〇八万五千（一九五一年の数字）のうち、精神病患者用のベッドは九・二％をしめるだけである。⁽³⁸⁾またアメリカ精神医学協会の総裁ウィリアム・メニンジャーによれば、合衆国ではこのまえの戦争で徴兵検査を受けた一、五〇〇万の壮丁のうち四八万七千人が不合格だったが、このうち三八％はノイローゼによるものであった。また健康上の理由でのちに動員解除になった一一二万五、六二一人の兵士のうち、ノイローゼによるものがやはり三八％もしめていた。ところが第二次世界戦争中、一般に戦争は異常なショックによって非常に多くの戦争神経症患者をうみだすにもかかわらず、赤軍ではノイローゼないし精神病はきわめて少なかった。精神病患者用のベッドは、野戦病院では全ベッド数のうち〇・二％、後方病院は〇・一

％で十分だったのである。では一体、どうしてソ同盟ならびに赤軍ではノイローゼが「流行」しないのか。ソ同盟に派遣された英米加医学使節団団員ウィルダー・ペンフィールドはこたえている。「なぜなら、ソ同盟には独得の予防薬の予備が沢山あるからである。この独得の予防薬の予備とは高いモラルの存在にほかならない。⁽³⁹⁾すなわち、社会主義社会というすぐれた環境とこれを擁護しようという高いモラルこそ、ノイローゼを減少させ、またこれを「流行」させないもっとも有効な保障になっているのである。

合衆国とソ同盟についていえば、前者は世界最大の帝国主義国であり、後者は社会主義から共産主義への過渡期にある世界でもっともすすんだ国である。そして精神医学の面でみれば、前者ではフロイト主義が支配し、後者ではパヴロフ理論が指導している。人間による人間の搾取がなくなったソ同盟では、戦争宣伝もなく失業と零落の不安もなくなっており、したがってノイローゼをおこす異常なショックは圧倒的に少なくなっている。そのうえソ同盟では、厳密に科学的な方法にもとづいて、患者にたいし社会主義的ヒューマニズムの治療が最大限におこなわれ、また患者が社会的にたちなおるために十分な配慮がなされ、さらにノイローゼや精神病そのものをなくする予防精神医学が発達している。ところが合衆国では、失業や恐慌の不安はいうまでもなく、マッカーシーズムや人種的差別待遇等が国民にたいして異常なショックをあたえ、気狂いじみた「心理戦争」が自国民にたいしてしかけ

られてきた。しかもこうしてうまれてくるノイローゼ患者は、フロイト自身の言葉をつかえば、あたかも「秘密結社の一員で秘密の学をいとなんでいる」⁽⁴⁰⁾「精神分析医によって「治療」(?)されるのである。アメリカで、そして最近では日本でもノイローゼ患者がますます増加し、⁽⁴¹⁾他方ソ同盟ではノイローゼ患者がますます少なくなつてゆくのはこのためである。

さてわれわれは、「社会心理学の批判」というこの論文のテーマからいささかはなれたようにみえる。しかし以上かんたんにみたようなマルクス主義心理学の生理学的基礎をはっきり理解しなければ、われわれはフロイト主義にたいしてけつして積極的に対決することができない。またマルクス主義心理学の社会科学的観点と階級的立場をはっきりさせてはじめて、つぎにみるように精神分析の「新しい道」ないしは「社会学化」を自称する新フロイト主義の偽瞞性をはつきり批判できるのである。

註(1) マルクス主義心理学の歴史をしらべる人は、いかに多くの「マルクス主義者」がフロイト主義を全面的にあるいはその「一部分だけ」を唯物論的・進歩的だと評価したかを知つておどろくであろう。ユリネッツ、ライヒ、ザビールの論争は有名だからここではのべないが、(くわしくは戸坂潤『イデオロギー概論』、乾孝『無意識の心理学』、木島春樹『マルクスとフロイト論批判』『理論』、四九年一二月号)をみよ、この論争に終止符をうつたとされるザビールさえ、フロイトの個々の命題に「科学的」価値をみとめ、また

本島氏自身も同じ立場にたっている有様である。ソ同盟では、ルリア、グリボエドフ、カナビーフ、ヴァコフ、ワイデミウラー、シチエルゴフなど代表的な心理学者・精神医学者が、フロイト主義の全部または「一部」を承認すべきだと主張した。こうしてフロイト主義にはいいものは一つもなく、マルクス主義と全く相反することが完全にみとめられるためには、一九三六年七月のソ同盟共産党中央委員会の決議をまたねばならなかった。(Cf. J. Wotis, *La Psychiatrie Soviétique*, Paris, 1953, pp. 92—101.) しかもそれでもフロイト主義は一掃できず、⁽⁴²⁾もつとも指導的な心理学者エス・エル・ルビンシュタインの書いた『一般心理学原理』(一九四六年)さえもフロイト主義におちいつていた。(Voir E. T. Chernakov, «Contre l'Idéalisme et la Métaphysique en Psychologie», en Wotis, *op. cit.*, Appendices, pp. 308, 311, 319ff.) ソ同盟においてさえこうであつたから、資本主義諸国で、マルクス主義をフロイト主義で修正しようという試みがどんなにひろくおこなわれたかは推して知ることができる。同様の論争はその後、フランスでもつづけられ (Voir Pierre Naville, *Psychologie, Marxisme, Matérialisme*, Paris, 1948, pp. 131—170.) またイギリスのすぐれたマルクス主義者ロッドウエルもフロイトは「ブルジョア科学の唯物論的伝統」をもちつづけていると評価し (Caudwell, *op. cit.*, p. 159.)、さらにジャック・リンゼーでさえ、フロイトとユングとゲシュタルト心理学をあわせると科学的な「統一的心理学」ができる⁽⁴³⁾とみなしているほどである。(J. Lindsay, *Marxism and Contemporary Science*, London, 1949, pp. 158—160.) しかし今日、フ

ロイトの「唯物論心理学」(2)と「ハルタス主義を折衷させよう」と試みる自称「ハルタス主義者」が一番多いのはアメリカにおいてである。アメリカがフロイト主義の世界的中心になっているから、フロイトによる修正ハルタス主義者もここに一番沢山うまれてくるのである。さきにあげたライプのほかにぎのような論者がいる。Judd Marmor, *op. cit.*; M. Carroll, "On Bartlett's Psychoanalytic Views," *Science & Society*, Fall, 1945; J. T. Stone, "The Theory and Practice of Psychoanalysis," *Science & Society*, Winter, 1946. アメリカのハルタス・フロイト主義者の主な特徴はほとんど例外なく「新フロイト主義」の立場に立つることである。

- (2) 『ハーヴィン全集』第一巻「邦訳」一三〇ページ。
- (3) XV, S. 103. (4) XV, S. 178.
- (5) J. Lindsay, *op. cit.*, p. 157.; J. T. Stone, *op. cit.*, p. 60.
- (6) 意識と無意識の関係を弁証法的に把握しようとする努力が最近、アメリカのハルタス主義者のあつたじきなされてる。Cf. Michael Lane, "The Conscious and the Unconscious in Human Behavior," *Science & Society*, Fall, 1951; L. S. Williamson, "An Approach to the Interpretation of Dreams," *Science & Society*, Winter, 1955. 多くは後者は、ペタロン理論を積極的に適用したものであるとして評価されている。
- (7) たとえば、前述のストーンはこの点にフロイトの「進歩性」をみなさんみな主張する。(J. T. Stone, *op. cit.*, p. 59.)
- (8) XV, S. 142. (9) XV, S. 144.

- (10) Karen Horney, *New Ways in Psychoanalysis*, N. Y., 1938, p. 110.
- (11) H. フリット「婦人論」『国民文庫』一三〇ページ。
- (12) *Asahi Evening News*, Sept. 24, 1954.
- (13) J. H. Lawson, *op. cit.*, pp. 60—72.
- (14) Д. Я. Леонов, «Социология двуногих животных», Вопросы Философии, No 2, 1954, стр. 250—252.
- (15) 上記の「ハルタス主義者」の主張を「ヤー・ヤー」Cf. Zalman Behr, "Principles of Rational Psychotherapy," *Science & Society*, Fall, 1952.; "Consciousness and Practice in Rational Psychotherapy," *Science & Society*, Summer, 1953. 上記の主張を「ヤー」Cf. J. C. Clayton, "Some Problems in the Struggle against Psychoanalysis," *Political Affairs*, April, 1954, pp. 48—50.; B. Wilson and J. Cooper, "The Limits of Rational Psychotherapy," *Science & Society*, Fall, 1953, pp. 351—355.
- (16) Freud, *Vorlesungen*, SS. 288—9. (17) *Ibid.*, S. 292.
- (18) *Ibid.*, S. 454. (19) *Ibid.*, S. 450.
- (20) *Ibid.*, SS. 253—4. (21) *Ibid.*, S. 463.
- (22) *Ibid.*, S. 403.
- (23) I. Pavlov, *Oeuvres choisies*, Moscou, 1954, p. 258.
- (24) Freud, *op. cit.*, SS. 284, 465; XV, SS. 165—7.
- (25) Otto Fenichel, *The Psychoanalytic Theory of Neurosis*, N. Y., 1945, pp. 581—2.
- (26) XV, SS. 167—8. (27) XV, S. 168.
- (28) O. Fenichel, *op. cit.*, p. 562.

- (29) 拙稿『アメリカ心理学の批判』を参照。
- (30) XV, SS. 34—61.
- (31) Raymond B. Fosdick, *The Story of the Rockefeller Foundation*, N. Y., 1952, pp. 126—134.
- (32) クラウド・ブリストル『信念の魔術』、ノーマン・V・ピール『積極的考え方の力』、谷口雅春の著書その他多数をみよ。
- (33) *Scientific Session on the Physiological Teachings of Academician I. P. Pavlov*, Moscow, 1951, p. 23.
- (34) Pavlov, *op. cit.*, pp. 279—280, 562—567. もちろん、この動物の実験神経症を人間の神経症を理解する基礎とかがえられることは、二つの反論が提出されるであろう。一つは動物の実験神経症は人間の神経症に通用しないというフロイト主義者（たとえばP・シルダー）からの反対であり、他ははつきりと「反対」を表明しないが事実上はパヴロフの実験神経症の思想を俗流化するネオ・パヴロフ派ないしネオ・ビヘヴィアリズム（リデル、マッサーマンその他）の傾向である。前者にたいする反批判としては、I. P. Pavlov, *Conditioned Reflexes and Psychiatry*, N. Y., 1941, pp. 83—85. をみよ。後者については、加藤正明・岡田靖雄『精神病理学総論』（『異常心理学講座』所収）二四ページおよびV. J. McGill, “The Mind-Body Problem in the Light of Recent Psychology,” *Science & Society*, Fall, 1945, pp. 352—3. を参照。
- (35) ソ同盟の精神衛生・臨床においてパヴロフ理論がいかに具体的に応用され実践されているかについては、ここではくわしくふれない。ウォーチスの著書のほか、岡田靖雄

『ソヴェトでは神経症をどう理解しているか』、S・N・ダヴィデンコフ『神経症予防の基礎』（以上いずれも東大京大ソ医研発行の『ソヴェト医学』一一号所収）、S・S・N・ダヴィデンコフ『パヴロフ学説にもとづいた神経症の治療』（『ソヴェト医学』一二号）を参照。

- (36) *Scientific Session*, p. 134.
- (37) このような社会心理学にもとづくエセ科学的研究に日本人文科学会編『社会的緊張の研究』がある。
- (38) J. Wurtis, *op. cit.*, p. 60. により計算。
- (39) *Ibid.*, p. 272. (40) XV, S. 76.
- (41) 一九四九年一一月の調査によれば、日本では「現在症状を有する精神障害者」の数は少くも一三〇万人にもおぼろ、精神障害患者は、人口千人につき約一五名にたつする。しかもここでのいう「精神障害者」は「高度のもの」のみを指しているの、実態ははるかに上廻るとみられる。国立精神衛生研究所『精神衛生資料』、三号、五五年、四ページによる。

五、新フロイト主義社会心理学の批判

新フロイト主義（あるいは「フロイト左派」ともよばれる）とは、ほぼ一九三〇年以降、最初はナチスに追われた亡命学者によって、またさらにアメリカの学者がくわわって唱えられた「新しい」精神分析の理論である。

この学派がなぜこの時期に生まれ、また流行するようになったかについては、いろいろの理由があるが、根本的には、旧来のフ

ロイト主義の粗雑さが、理論的にも実証的にも誰がみてもあきらかになったこと（たとえば「エディプス・コンプレックス」という概念がまったく事実と反することは人類学ならびに原始社会史のイロハである）、そしてこのために、フロイト主義自体が「新しい」形態をとらざるをえなくなったことによるものとわたくしはかんがえる。それは、フロイトの弱点であった本能主義・生物学主義を「批判」し、これを「社会」、「文化」、「パースナリティ」を重視することによって補うことを主張した。この学派にぞくするものには、心理学ないし社会心理学では、エーリッヒ・フロム、ウィルヘルム・ライヒ、フランツ・アレキサンダー、カレン・ホルネイなどがあり、また精神医学ではハリー・S・サリヴァン、政治学ではラスウェル、人類学ではR・ベネディクト、J・ハロウェル、R・リントン、M・ミード、E・サピア、A・カーディナー等がいる。またわが国では、戦後とくに日高六郎、南博、清水幾太郎などの諸氏によってひろく紹介され、多くの若い有能な社会学者、政治学者のうちにかなりの影響をおよぼしている。

戦後のわが国で、フロイト主義とともに、いやフロイト主義以上に、新フロイト主義がどうして学界に浸透するようになったのか。根本的には、アメリカ・イデオロギー、とくに「心理学主義」の支配によるものであるが、とくに第一の理由は、新フロイト主義者の若干が社会科学ないしはマルクス主義をかならずしも

「排撃」せず、むしろ「とりいれて」いるようにみえるからであり、また第二に、これらの論者が多くはナチスに迫害された亡命学者であり、そのかぎり反ファシズム的な、進歩的な心理学者であるようにみえるからであろう。小田切秀雄氏はつぎのように主張されている。

「フロムらのフロイト左派がこの領域で展開しはじめている研究は、従来のようなマルクス対フロイトの敵対的關係とちがって、社会的に抑圧され無意識化されていた人間の要求の解放を個人的にも社会的にも実現してゆく上で、マルクス主義的な動向と協力する可能と必要とを示している。マルクス主義的な社会科学は、すでにこれらの社会心理学およびこれと結びついた最近の政治学の動向から多くを学ぶことが必要であり、そのことによって心理についても政治についても一層科学的な有効な学問に自己を高めてゆくことができるであろう。」⁽¹⁾

小田切氏のようなすぐれたマルクス主義者でさえこのように考えるのであるから、新フロイト主義が非マルクス主義者ないしマルクス主義に近い人々に歓迎されなかったとしたら、かえって不思議というほかないだろう。だが、本当にマルクス主義は「社会心理学」ないしこれと結びついた「近代政治学」から学ぶことが

できるか。われわれは、つぎにまず日本でもっともよく紹介されたフロムを中心として新フロイト主義の「理論」と「実践」を分析し、これをあきらかにしよう。

新フロイト主義はどういう論理構造をもっているか。

新フロイト主義の第一の論法は、「古くなった」フロイトにたいする「徹底的な批判」である。それはまずフロイトの心理主義、本能主義ないし生物学主義の「批判」から出発する。フロムはその著『自由からの逃走』でつぎのようにいっている。

「この本でなされる分析は、フロイトの観点とは反対に、つぎの仮定にもとづいている。すなわち心理学の中心問題は個人の世界にたいする特殊な関係という問題であって、あれやこれやの本能的欲求それ自体の満足や不満という問題でないこと、さらに人間と社会のあいだの関係は静的なものではないことである。」⁽²⁾

フロイトはどのような文化における個人をもたんなる人間一般としてとらえ、近代人固有の感情や不安をも人間の生物学的構造にもとづいた永遠の力によるものとみなしたと、フロムは批評する。そしてフロムは、フロイトが純粹に心理学的な立場から「心理人」(homo psychologicus)という観念をつくりだしてこの観点からだけ人間をえがいたが、これは古典経済学における「経済

人」(homo economicus)と同じく非現実な虚構にすぎないというのである。同様に、女流新フロイト主義者ホルネイも非難する。「フロイトが文化的諸要因を無視したおかげで、まちがった一般化がうまれただけでなく、われわれの態度や行動を動機づける現実の力が大部分理解できなくなっている。文化的諸要因を無視したことこそ、……精神分析が袋小路におちいった主要な理由」⁽⁴⁾にほかならない。

人間をうごかしているもの、それは永遠にかわらぬ本能や衝動ではなく、むしろ「文化」であり、「社会」である。神経症をうみだすものも、実は「文化的要因」のうちにもとめられねばならないというのである。

こうして新フロイト主義の第二の論法は、「社会」・「文化」の概念を積極的に導入し、「社会心理学」をとくことである。生物学主義的なフロイトとは反対に、新フロイト主義者によれば、「人間のパースナリティにたいする根本的アプローチは、世界、他人、自然、自分にたいする人間の関係を理解することである。われわれは、人間は一次的に社会的存在であるとかんがえる。そしてフロイトが仮定するように一次的に自己充足的であり、本能的欲求をみたすために二次的にのみ他人を必要とするものではないとかんがえる。この意味で、個人心理学は根本的には社会心理学であり、サリヴァンの用語をつかえば対人関係の心理学である。」⁽⁵⁾いまや、本能、愛、衝動などフロイト的な概念にかわって、新ら

しい「文化的」・「社会的」な概念がとってかわらなければならない。生物学的心理学にたいして「社会心理学」がとってかわらなければならない。こういって、フロムは「社会的性格」(Social character)・サリヴァンは「対人関係」(Interpersonal relationships)・ホルネイは「根本的不安」(Basic anxiety)・「競争性」(Competitiveness)等々の「新しい」概念をつくりあげた。また「個人心理学」が「社会心理学」になるだけでなく、サリヴァンによれば、「精神医学」は「社会心理学」にならなければならない⁽⁶⁾とされたのである。

これらのいろいろの「新しい」概念の一つを検討してみよう。たとえば、「社会的性格」とはどういうものか。フロムはいう。それは、「個人のもっているいろいろの習性のうちからたんにえらんだきたもので、一つの集団の大多数のメンバーの性格構造の本質的の中核であり、その集団に共通の基本的経験と生活様式の結果発達したものである。」⁽⁷⁾したがってこの概念は、「社会過程を理解するのに鍵になる概念である。性格とは分析的心理学のダイナミックな意味では、人間のエネルギーが、所与の社会の特殊な生存様式にたいし人間の欲求がダイナミックに適應することによって形成される特殊な形式である。」⁽⁸⁾このようにして、「社会的性格」が一切の社会過程を理解するもっとも重要な概念になる。フロムによれば、マルクス主義は経済的生産関係を社会の土台とみなし、これが上部構造としてのイデオロギーのありかたを決定する

としたが、これは「エセ・マルクスの」(?)な「経済主義的」アプローチにすぎない。(「エセ・マルクス主義」から「正統マルクス主義」を擁護しているような口吻である。)またウェーバーは、精神が社会を決定するとしたから「観念論的」である。つまりフロムの主張によれば、どちらも「一面的」であるから、土台と上部構造のあいだにあたらしく「社会的性格」という概念を挿入しなければならないのであって、これが、一方ではイデオロギーや文化のありかたを決定し、他方では「社会過程を形成する生産的な力」⁽⁹⁾となる。たとえばナチズムのイデオロギーならびにナチズムの社会過程を決定したものは、ナチ運動の中核(?)となった「下層中産階級」の「肛門的性格」であったというのである。

たしかにこの「社会的性格」という概念はきわめて動的にみえ、また具体的にみえる。それは、フロイトの心理主義ないし生物学主義にとってかわるが、しかもかえす刀で、マルクスの「経済決定論」にとってかわらねばならない。人間の神経過程が心理的現象の物質的基体であるのではなく、また生産関係が上部構造を終局的に決定するのではなく、決定的なのは、いろいろの社会ないし階層に特有な「社会的性格」だとされるのである。

われわれは、フロムの「社会的性格」・ホルネイの「競争性」や「根本的不安」・サリヴァンの「対人関係」等の概念が、一見「文化的」・「社会的」にみえながら、この「社会」たるや、現実の階

級社会とあまり関係のない抽象物にすぎないことについては、ここではくわしくふれない。⁽¹⁰⁾

重要なことは、新フロイト主義者によって提唱された「社会心理学」ないしは「社会的」諸概念が、けっしてフロイトを排斥せず、むしろ本質的には、フロイト主義の「新しい」復活、とくにマルクス主義に反対するための「新しい」復活にすぎないことである。実際、これらの新フロイト主義者たちは、フロイトの「生物学主義」を非難し、フロイトに「社会心理学」的視野がなかったと主張するが、すでにわれわれは、フロイト自身が「社会心理学」ないし「集団心理学」を展開したのをみなかったであろうか。「社会学的傾向」を自画自讃する新フロイト主義者たち、ならびにかれらが「古い」フロイト主義よりも「新しい」と賞讃する人々が、ほとんど例外なくフロイト自身が「社会心理学」者であったことについて沈黙をまもっていることは特徴的である。注意しなければならぬことは「生物学主義」といふ「社会学主義」といい、お互いに排斥し、非難しているようにみえるが、その本質は同じ思想の表裏であることである。「生物学主義」ならびにその変種としての「生理学主義」は、人間の心理現象の法則とその特殊性を無視し、俗流化するがゆえに、かならず「社会学主義」をみちびかざるをえないのであり、また「社会学主義」は、社会的諸法則の特殊性を否定し、これを俗流化することによって、かならず「生物学主義」ないし「生理学主義」・「心理学主

義」に落ちいらざるをえない。⁽¹¹⁾「生物学主義」と「社会学主義」は表裏の関係をなしている。スペンサー、ジュームス、デューイ、フロイトなどがそのいい例なのである。

このようにして、新フロイト主義者の第三の論法がでてくる。すなわち、フロイトを「批判」し、「社会」ないし「文化」の要因を重視するといながら、実は、かれらが「批判」したはずのフロイトの根本概念を密輸入し、「新しい」装いのもとにフロイトの生物学主義、本能主義、心理主義を復活することである。社会過程を理解するためには、社会の客観的経済法則をではなく、むしろ反対に「個人のうちに作用している心理的過程の力学を理解しなければならぬ」⁽¹²⁾。こういつてフロムはつぎのようにつづける。「この本は社会過程全体における心理的諸要素の役割を強調しており、またこの分析はフロイトのいくつかの基本的発見、とくに人間の性格における無意識的な力の作用とその外界の影響にたいする依存についての発見にもとづいている」⁽¹³⁾したがって、社会的諸現象を理解するためには、その「根底にある心理的メカニズム」⁽¹⁴⁾を知らねばならず、またフロイトの中心概念である「無意識的な力」を利用しなければならぬ。しかし、このような新フロイト主義の「心理学」は「心理的現象の物質的基体——神経過程」を無視するかぎり、ふたたび「衝動」「本能」を強調するばかりではない。「文化への動的な適応過程において、沢山の強力な衝動が發展し、これらの衝動が個人の行動と感情を動かすのである。

しかしどのようなばあいにも、これらの衝動は強力であり、ひとたび発展すれば満足を要求する。そしてこんどは逆に社会過程を形成するのに影響をもつ強力な力となる。⁽¹⁵⁾フロムによれば、人間は自分では合理的だと思っているかもしれないが、実際は遠い昔から人間のうちにひそんでいる「悪魔的な力」につかれているのだ。

この「悪魔的な力」とはなにか。それは「生存衝動」と「破壊衝動」であり、これが一切の社会現象を説明しなければならぬ。フロムはいう。

「生命はそれ自身の内的な力学をもっている。すなわち生命は成長と表現と生存をもとめる傾向をもっている。この傾向が妨害されると、生命をもとめるエネルギーは分解過程を経て、破壊をもとめるエネルギーにかわるようにおもわれ⁽¹⁶⁾る。いいかえれば、生命をもとめる衝動と破壊をもとめる衝動とはたがいに独立した要因ではなく、からみあつて相互に依存している。生命をもとめる衝動が妨害されればされるほど、破壊をもとめる衝動はつよくなる。生命が実現されればされるほど、破壊力はよくなる。破壊性は生ぎられない生命のはけぐちである。生命を抑圧するこれらの個人的社会的諸条件が破壊への情熱をうみだし、この情熱がいわば貯水池となつて、他人にむかうにせよ、自分にむかうにせよ、そこ

から特殊な敵対的傾向がそだてられるのである。⁽¹⁶⁾」

フロイト主義は観念論のうちで一番おそまつな主観的観念論であり物活論であつたが、新フロイト主義はどうかといえ、ごらんのように、さらにわをかけておそまつな生物学的観念論であり、生気論の復活である。階級社会におけるありとあらゆる破壊、たとえば帝国主義戦争もファシズムの暴力も、すべて「生きられない生命のはけぐち」にすぎないとされ、その社会的・政治的本質はまったくかくされてしまふのである。

われわれは、さきにフロイト主義の論理構造を分析して、帝国主義段階のブルジョア・イデオロギーにほとんど共通の「三段階論法」をあきらかにしたが、同様の論理構造は、新フロイト主義にもそのままてはまる。それは「古い」フロイト主義を「克服」し、「社会」ないし「文化」を重視して、マルクス主義からさえも「学んだ」ようにみえた。だがまさにそれだからこそ、新フロイト主義はけつして「新しく」ない。なぜなら「経済的要因」の重要性をみとめ、マルクス主義に「譲歩」することくらいは、フロイト自身がやつてきたところだからである。⁽¹⁷⁾この意味で、「新」フロイト主義で「新しい」もの、それは外観だけであり、口先だけであつて、その実体は、もつとも「古い」フロイト主義であり、野蛮な生気論にほかならなかつた。ちやうど「新」カント主義がカントよりもつとおそまつであり、「新」マルサス主義

がマルサスよりもっと俗流化しているように「新」フロイト主義はフロイトを一步もでていない。いや、もっとわるくさえなっている。エピゴーネンというものは本物よりもっとおそまつだということ、これくらいはつきりしめすものはないのである。

われわれは以上において新フロイト主義の論理構造をあきらかにしたが、つぎにこの新フロイト主義の「実践」、すなわちそれがその「新しい理論」をいかにファシズムの分析に応用したかをみよう。なぜなら、新フロイト主義による「ファシズムの社会心理学的分析」こそ、これまでこの「社会心理学」の最大の売りものとされ、その「進歩性」と「有効性」の証拠とされてきたからである。

さて、すでにみたように、フロムの社会心理学の中心概念は「社会的性格」であった。では、かれはこの概念をつかつてどのようにファシズムを「説明」するのか。

第一にこの社会心理学者が証明しようとするのは、中世社会すなわち封建社会は一般にかんがえられているようにけっして暗黒時代ではなく、むしろきわめて「安定」した「平和」な社会だったというテーゼである。なるほど、封建社会には近代的な意味での自由はなかったかもしれない。しかしそこでは、人間は孤立しておらず、生れたときからすではつきりと固定した地位を持ち、全体の有機体的構造において各々がところをえていた。社会

的秩序は自然的秩序とみられ、人々は「安定感」と「帰属感」を感じていた。そしてこの固定した地位という限界をやぶらぬかぎり、封建社会の人々は仕事の上でも感情の上でも自由を享有していたというのである。

ところが、——とこの社会心理学者はつぎのように主張する。

資本主義が封建社会を打倒して個人の不変の地位を破壊したのちは、なるほど個人は自由を手にいれたけれども、実際は安定した社会秩序からきりはなされ「一人ぼっち」で「孤立」したものになった。フロムはいう。「封建社会という中世的体制の崩壊は、社会のすべての階級にとって一つの重要な意味をもった。個人はひとりぼっちになり、孤立させられた。個人は自由になった。この自由は二重の結果をうみだした。人間は享有していた安全感と疑いの余地のない帰属感をうばわれ、経済的にも精神的にも安全感をもとめる人間の要求をみたしてくれていた世界からきりはなされた。かれは一人ぼっちで不安におそわれた。」⁽¹⁸⁾みられるように、フロムは封建社会を打倒したものは人民大衆の巨大な力であったこと、また資本主義が膨大なプロレタリアートの大群をうみだし、人々を「孤立」させるどころか、いやおうなしに団結させる事実を忘れてしまったようである。

ともかくこの社会心理学者によれば、人間というものは、自由になればなるほど、また「一人ぼっち」になればなるほど、「不安」のあまり、本能的に「自由」から逃避する心理的メカニズムをも

っている。そしてこのメカニズムは「服従と支配をもとめる要求のうち、あるいはむしろ、程度の差はあれ、正常な人々、とくに神経症的な人々に存在するマゾヒズムのおよびサディズム的要求のうち」⁽¹⁹⁾に「みいだされる。このようにして、フロムは、近代社会、とくにドイツその他ヨーロッパ諸国の下層中産階級ではサド・マゾヒズムが「社会的性格」になると主張する。いまや人々は、近代社会の「自由」がわずらわしくなって、かつて封建社会で感じていた「帰属感」や「安定感」に憧れを感じ、失われた「第一次的」絆（封建社会）のかわりに、サド・マゾヒズムに駆られて、新しい「第二次的」絆（ファシズム）をもとめざるをえない。ナチズムがあのように野蛮な独裁をひくことができたのは「下層中産階級」のサディズム的「社会的性格」のためであり、また人々が「自由」から逃避してファシズムのもとに「安定感」をもとめようとしたのは、同じく「下層中産階級」のマゾヒズム的「社会的性格」のためだといっているのである。

ごらんのように、この社会心理学者の主張によれば、ファシズムをもたらした真の責任者はファシストでも独占資本家でもなくて、「自由」をおそれ、「自由」のつかい方を知らないで「自由」から逃避した人民大衆にほかならない。社会心理学は、一連の帝国主義諸国ならびに植民地・従属国でファシズムが支配したのは、全般的危機の下での独占資本の脆弱化と兇暴化、ならびに社会民主主義指導者による裏切りによるものであることをかくし、

その原因を、われわれのいかんともしがたい衝動、すなわちサド・マゾヒズムという「社会的性格」によって説明する。ファシズムとは、金融資本のもっとも反動的な排外的な帝国主義的な要素の公然たるテロ独裁ではなくて、下層中産階級の運動にすりかえられるのである。

こうして新フロイト主義の社会心理学は、ファシズムの本質をばくろしこれを批判する科学ではなく、反対に、ファシズム支配の「必然性」を「心理的メカニズム」によって合理化する「心理学」であり、ファシズムにたいする敗北主義の「心理学」である。なぜなら、フロムによれば、「下層中産階級」のいるところ、かならずサド・マゾヒズムという「社会的性格」が「社会的過程」を産みだし決定するからであり、反ファシズム闘争や労働者階級を中心とする統一戦線の役割などまったく無意味なものにすぎなくなるからである。新フロイト主義は、封建主義者と金融資本家に免罪符を発行して、封建社会とファシズムを美化する「社会心理学」的弁護論である。フロムが、ファシズムの哲学者ニッチェを「一九世紀の進歩的自由主義思想」の代表者とよび、またファシズムの心理学者フロイトを「啓蒙精神の典型的代表者」とよんだのはまったく不思議ではない。⁽²⁰⁾

服従し支配しようとする「衝動」によってファシズムを「説明」した社会心理学のつぎにやる仕事は、一方では資本主義社会の階級的対立を陰蔽して、人民大衆を「群衆」にひきさげ、「機械

時代」観によって労働者階級と社会主義を「批判」するとともに、他方では、「民主主義」という名の「組織された資本主義」の理論によって独占資本にもう一度御奉公することである。そしてこの目的のためにフロムはマルクスから「自己疎外」の概念を借用し、これを偽造してその社会心理学に利用する。「自己疎外」という概念についていえば、これはもともとマルクスでは、剰余価値の法則からでてくるプロレタリアートの絶対的窮乏化・非人間化をさす概念であった。ところがフロムは、この概念を沢山の修正マルクス主義者にならって階級対立を無視したたんなる人間学主義的概念につくりかえる。⁽²¹⁾現代社会では、人間は工場を建て、自動車や衣服をつくり、穀物や果物を生産した。しかしかれは、自分の手でつくった生産物から疎外されてしまった。人間は自分のつくった商品の主人ではない。逆に人間のつくった商品が人間の主人になっているとフロムはいう。まことにそのとおりである。だがフロムによれば、現代社会がこのような「自己疎外」の現象をうみだしたのは、現代が資本主義社会だからではなく、「機械時代」だからである。たとえばフロムはつぎのように主張する。資本家は他の人間をあたかも機械を雇うように雇うが、このばあい、雇主も雇人もともに互いに他を利用しあっているにすぎない。労働者は機械のように使われるからお気の毒だが、資本家もまた労働者に「利用」されており、労働者の「道具」になっているのだから、同様にお気の毒である。⁽²²⁾すなわちこの社会心理

学者は、資本主義社会の階級的対立をかくし、一切の責任を資本家ではなく「機械時代」ないしは「機械化」された社会機構にすりかえてしまう。「人間は今日貧乏で苦しんでいるというよりも、むしろ人間（労働者だけでなく、かわいそうに資本家さえも——芝田）が大きな機械の一歯車、自動人形になってしまったという事実、かれの生活が空虚になり、その意味を失ってしまった」という事実で苦しんでいる。⁽²³⁾「どうやら「ヒューマニズム」(?)にもえるこの社会心理学者は、今日、最大限利潤の法則によって何億の勤労大衆や植民地・従属国の人民が零落させられ、飢餓に瀕している事実よりも、むしろ一握りの独占資本家が労働者に「利用」され、そのため「人間性を失って」いる事実で苦しんでおられるようである。

現代は「機械時代」である。社会心理学は現代社会をこのように特徴づけるが、⁽²⁴⁾かような「機械時代」的社会観はなにをみちびくか。それは、第一に資本主義社会における一切の階級的・社会的対立を「機械時代」というヴェールでかくし、今日、平和と民主主義のためにたたかっている人民大衆を、右往左往して創造性を失ってしまった機械のような「群集」にひきさげてしまう。労働者階級の組織的・政治的役割の巨大な意義を抹殺するだけではない。それは、第二に労働者階級が団結し自らを組織するとき、この団結と組織もまた労働者を機械化し、個性をうばうといって非難する。たとえばフロムによれば、今日、多くの組合はそれ自

身巨大な組織に発展し、個々の成員の創意をいれる余地はほとんどなくなつてしまつた。個々の労働者はその維持費をはい、ときには選挙をするが、ここでもかれは大きな機械の小さな歯車になつてゐるという。⁽²⁵⁾ ごろんのように、この社会心理学者は労働者階級の闘争、団結、組織化を労働者の個性をなくさせるものだとして「批判」するとともに、かえす刀でソ同盟と社会主義を「批判」する。「わたくしは社会主義が偽善的な言葉になつたロシアを忘れることができない。」というのは、そこでは生産手段の社会化はすでに実施されているけれども、⁽²⁶⁾ 実際は「強力な官僚制が巨大な住民の集団をあやつっているから」だそうである。

とどのつまりは反ソ反共の十字軍に参加した社会心理学は、それでは一体、どのようにして現代の「自己疎外」を克服しようというのか。労働者階級の自己疎外を真に解決するものは労働者階級の団結と社会主義だけであるのに、かえつてこの団結と社会主義を「自己疎外」とよび「官僚制」とみなした社会心理学は、資本家の「自己疎外」をどのように解決するのか。いうまでもなく、革命によってでなく、改良によってである。いいかえればこの「機械時代」を「合理的」、「知性的」、「計画的」に運営することによつてである。フロムはいふ。

「社会の非合理的、無計画的性格は、計画経済、すなわち社会そのものの計画的、協調的努力をあらわす計画経済によ

つておきかえられねばならない。……われわれはこの新秩序を民主主義的、社会主義と名づけることができる。しかし名前は問題でない。「そのとおり！」問題は人々の目的に奉仕する合理的経済制度をうちたてることである。……国家全体が、経済的社会的力を合理的に支配する計画経済においてのみ、個人はその仕事において責任をわけもち、創造的知性をつかうことができる。」⁽²⁷⁾

かつてフロイト主義は、修正マルクス主義と社会民主主義の支柱の一つになつたが、⁽²⁸⁾ ごろんのように、新フロイト主義のゆきつくとともに、悪名高い「民主主義的社会主義」であり「組織された資本主義」理論の復活である。たしかに「名前は問題でない」！うたがいもなく、フロムはここで「計画経済」という名の国家独占資本主義を弁護しているのである。デューイのプラグマティズムが「民主主義的社会主義」の哲学であり、⁽²⁹⁾ 組織された資本主義の哲学にすぎなかつたとすれば、フロムの社会心理学は、「民主主義的社会主義」と「組織された資本主義」の心理学にすぎないのである。

われわれは、これまで、主としてフロムを中心として新フロイト主義社会心理学の「理論」と「実践」を分析し、その反科学的本質とイデオロギイの実体をあきらかにした。もちろんただち

に、フロムだけが新フロイト主義者ではあるまいという反論がなされるかもしれない。しかし他の新フロイト主義者について検討すればするほど、ひとびとは、そこにフロム以上に皮相な反科学性とおどろくべき蒙昧主義をみいだすだろう。われわれ、ここでは、新フロイト主義者たちのゆきつくところが信仰主義を擁護し、⁽³⁰⁾ また排外主義と人種主義を弁護していること、さらには戦争の本質をかくし、あるいはアメリカ型ファシズムを美化していることについてはくわしくのべる余裕をもたない。しかし、これらの心理学者たちがどんなに馬鹿げているかは、たとえば、歴史を「精神医学」によって解釈すべきだと提案したC・S・ブリューメルの発言をみるだけで十分である。この社会心理学者によれば、クロムウェル、ジョン・ブラウン、ジャンヌ・ダルク、スターリンらは「分裂病患者」であり、ジョージ三世やナポレオンは「躁鬱病患者」だそうである。このように歴史を漫画にするブリューメルは「歴史の精神医学」の必要をつぎのようにとく。

「人々の支配者とかれらの業績を論ずるよりも、むしろ支配者たちをしてそういう行為をさせたパースナリティの病気を論ずる歴史書をよんだ方が面白いだろう。このような歴史は、軽躁病や分裂病や似たようなテーマをとりあつかうだろう。このような歴史は、戦争と征服については、たんにこれをおこした精神病との関係においてのみふれるだろう。歴史

を評価するばあい、軽躁病は火薬と同じく重要であり、分裂病は原子爆弾と同じく意義あるものであろう。⁽³²⁾」

たしかに火薬ですべてを決しようという軍国主義者が軽躁病的であり、原子爆弾で世界征服をめざす帝国主義者が分裂病的といわれねばならないことは本当である。しかしこのことは、異常心理が歴史をうごかしたことを意味しないし、異常心理がなければ歴史がちがった道をあゆむことを意味しない。異常心理が歴史を動かすのでなく、反対に、歴史がとくに没落する支配者階級に異常心理を流行させるのである。そしてこの流行は、いまや異常心理を「研究」すると公言するフロイト主義者・新フロイト主義者自身をも精神異常にするほど深刻になっているのだ。歴史を異常心理や原子爆弾で説明できるとみなす社会心理学の「分裂病的」性格をこれほどはつきりさせるものがあるうか。

註(1) 小田切秀雄、前掲論文、一九五—六ページ。

(2) Erich Fromm, *Escape from Freedom*, N. Y., 1941, p. 12.

(3) Fromm, *Man for Himself*, N. Y., 1947, p. 7.

(4) K. Horney, *The Neurotic Personality of Our Times*, N. Y., 1937, pp. 20—21.

(5) Fromm, *Escape*, p. 290.

(6) H. S. Sullivan, *The Interpersonal Theory of Psychiatry*, N. Y., 1953, pp. 367—8.

(7) Fromm, *op. cit.*, p. 277. (8) *Ibid.*, p. 278.

- (9) *Ibid.*, p. 297. (10) J. C. Clayton, *op. cit.*, pp. 46—47.
 (11) これについて詳しくは、以下の論文を参照。《О философских вопросах психологии》(К итогам дискуссии), Всп. Фил., No 4, 1954. стр. 183—4.; К. М. Дедов, «К вопросу об отношениях между психологией и физиологией высшей нервной деятельности» Всп. Фил., No 1, 1954, стр. 216—8. ここで「生理学主義」という言葉をいつかいたが、われわれは「これとパヴァロフ理論をはっきり区別する。「生理学主義」についてはこの同盟での討論のほか、拙稿『アメリカ心理学の批判』一二五—六ページを参照。
 (12) Fromm, *op. cit.*, p. viii. (13) *Ibid.*, pp. 9—10.
 (14) *Ibid.*, p. 134. (15) *Ibid.*, p. 22.
 (16) *Ibid.*, pp. 183—4. (17) XV, SS. 193—4.
 (18) Fromm, *op. cit.*, p. 99. (19) *Ibid.*, p. 142.
 (20) Fromm, *Man for Himself*, pp. 212—3.
 (21) 戦後における修正マルクス主義のもっとも大きな特徴は、「自己疎外」の概念をテコにしてマルクス主義を人間学主義につくりかえることである。このような修正主義は、右翼では「原始マルクス主義」論をとり、レーヴィットや猪木正道氏さらにシドニー・フックやランズフートの思想となり、左翼では、マルクス主義者であるホルニェやルフェールにも影響している。この点については、拙稿『ヘーゲルにおける「労働」の問題』(『思想』五三年八月号)で簡単にふれたが、最近、ドイツ民主共和国でも批判がおこなわれているようである。Vgl. R. O. Gropp, “Die marxistische dialektische Methode und ihr Gegensatz zur

- idealistische Dialektik Hegels,” *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 1 und 2, 1954.
 (22) Fromm, *Escape*, p. 118. (23) *Ibid.*, p. 276.
 (24) このような社会観は、フロムだけでなく、わが国の多かれ少なかれ良心的な、また進歩的な社会心理学者にほとんど共通したイデオロギーになっている。たとえば、フロムの思想が「私の内部に育ちつつあった思想……を支えかつ励ますものとなった」と告白される清水幾太郎氏をみよう。清水氏は主張する。「近代的人間の本質は、集団を機械の如きものとして完成するところに現われている。」(『社会心理学』七六ページ)人々はこの機械化された現代社会では「巨大な群集」としか考えられない。人間は自由でもなければ、理性的でもない。こうして「群集はビュロクラシーに対立する力でなく、ビュロクラシーの発達の前では殆んど無に等しいものとなる。巨人のような、マンモスのような、機械のような集団が聳え立つ社会過程において、街頭の群集の意義は急速に低下する。」(八五ページ)みられるように清水氏は、人民大衆、とくに労働者階級の巨大な組織的・政治的役割を無視し、人々をばらばらで無力で非合理的なものとみなす。
 では一体どのようにしてこの「街頭の群集」を救うのであるか。清水氏はこたえる。「機械時代は吾々の運命であり、また、吾々の条件であって、所詮、吾々はこれを受け容れねばならない。現代の不幸は、第一に、ビュロクラシーの支配が開始されているところにあるのでなく、却って、それが不足であり、社会生活の全体のうち多くの凹凸が生じているところにある。」(二〇三ページ)また「機械化、

官僚化、合理化は、その現実が如何なる混乱を示しているとも、飽くまでも、それは一つの進歩である。」(二〇二ページ)すなわち、今日の日本国民を真に解放する道は、民族独立と民主主義革命でなく、国際的には世界を「機械化」することであり、また国内的には国家を「機械化」、「合理化」、「官僚化」することになつてしまふ。「国際連盟や国際連合が追求してきた目標は……世界全体を一つのビュクラシーとして合理化することであり、「一企業の合理化、一国家の計画化を超えて、今、世界の機械化が要求されている。世界が一つのビュローになることが要求されている。」また国内的にいえば、「現在、若干の国家においては、戦争及び勝利という目的以外の目的のために、機械化、合理化、官僚化、計画化が進められている」という事実が重要である。」こういつて清水氏は結論する。「私の予想によれば、個人の自由や創意は、機械化及び合理化の拡大並びに貫徹を通して、この新しい条件の上にこそ復活する」のであると。(二〇六—八ページ)

清水氏が今日、独立と民主主義のためにたたかう日本国民にとつてきわめて尊敬すべき人物であることを、わたくしはすこしも疑わない。しかしそれにもかかわらず、清水氏の「社会心理学」はそれ自身の論理を歩む。清水氏の善意にもかかわらず、人々は、清水氏の「社会心理学」がそれ自身の論理によつてコスモポリタニズムと「組織された資本主義」の理論の弁護論になつてゐるのを見なかつたであらうか。階級的対立を捨象したテクノクラシー理論で社会科学をおきかえるかぎり、「社会心理学」は資本主義の弁護論にならざるをえないのである。

- (25) Fromm, *op. cit.*, p. 127. (29) *Ibid.*, p. 274.
- (27) *Ibid.*, pp. 272—3.
- (28) Vgl. M. D. Zebenkov, *Die reaktionäre Ideologie der Rechtssozialisten im Dienste des amerikanischen Imperialismus*, Berlin, 1953, SS. 64—66. またフロイトの本能主義が右翼日和見主義の思想的支柱になつてゐるだけでなく、「左翼」日和見主義であるトロツキズムとも結びつてゐることに注意せねばならない。ミーチン『弁証法的唯物論』、邦訳、四十二ページ参照。
- (29) Jim Cork, "John Dewey and Karl Marx," *John Dewey: Philosopher of Science & Freedom*, ed. by Sidney Hook, N. Y., 1950, p. 349.; John Dewey, "The Economic Basis of the New Society," *Intelligence in the Modern World*, ed. by J. Ratner, N. Y., 1939, pp. 416—433.
- (30) Fromm, *Man for Himself*, pp. 199—210.
- (31) このような新フロイト主義の代表的な人物はA・カーディナーである。(Cf. A. Kardiner, *The Psychological Frontiers of Society*, N. Y., 1948, Chap. 4.) カーディナーは、オランダ帝国主義の支配下のアロール島の人民の「パースナリテイ」を分析し、アロール島民はまったく「無能力」だから、オランダ人が支配してやらなければ滅びてしまふと「説明」する。そのほか、黒人人民や米英帝国主義の支配下にある植民地の未開社会民衆を「異常心理」によつて「説明」する新フロイト主義者として、ヘネディクト・ベートスン、ミード、オヴセイなどがある。Cf. J. C. Clayton, *op. cit.*, pp. 47—48.; *Scientific Session*, p. 67.;

Э. А. Баграмов, «О «психологической» разновидности американского расизма», Всп. Фил., No. 2, 1955, стр. 153—167. また南博『社会心理学』、一〇九、一四一—一三、一五二—一三、一六二ページをみよ。

(32) C. S. Bluemel, *War, Politics and Insanity*, Denver, 1948, p. 65. (S. S. Sargent, *op. cit.*, p. 301. による。)

六、フロイト主義とアメリカ・イデオロギー

最後にわれわれは、二つのことをみておく必要がある。第一に、なぜフロイト主義（以下、新フロイト主義もふくめて総称する）がアメリカ・イデオロギーの重要な一部分となったのか、その理由と、アメリカ・イデオロギーにおいてしめるその位置について。第二に、アメリカ・イデオロギーとしての社会心理学の機能について。

すでにみたように、フロイトの精神分析の理論がうまれたのは、前世紀末、ヨーロッパの頹廢的な金融資本の中心地ウィーンにおいてであった。しかし、ウィーンにうまれた帝国主義イデオロギーの諸形態（論理実証主義、意味論、近代経済学その他）が、そろいもそろって、ウィーンよりもっと頹廢的な金融資本の国、合衆国にその「安住地」をみいだしたように、フロイト主義もアメリカにその「安住地」をみいだした。一九〇九年、フロイトとユンクは、アメリカの心理学者でクラーク大学の総長であ

ったG・スタンレー・ホールにまねかれてアメリカにわたり、ここで精神分析について講演をした。フロイトはその『自伝』のなかでこういつている。「当時わたくしはやつと五三才の働きざかりでした。新世界にしばらく滞在したことによって、わたくしの自信はつよまりました。ヨーロッパではわたしは追放されているように感じていましたが、ここでは一流の人から同等の者として厚遇されたのです。」こうして、「アメリカでは、精神分析は、わたくしたちの訪問以来もはや土台を失うことはありませんでした。それは強力な保護の下、非常に流行し、沢山の著名な精神病医から医学の講座の重要な部分とみなされています。」⁽¹⁾「精神分析がもっとも歓迎され、もっともよく流行した国が合衆国であることは、どのような立場にたつ人も異論のないところである。

では一体、フロイト主義はなぜアメリカで歓迎され、なぜアメリカ・イデオロギーの重要な一部分になったのであるか。この点については、かならずしも明確になっていない。たとえば、宮城音弥氏にきいてみよう。氏によれば、フロイトがアメリカで流行した第一の理由は、その考えかたが遺伝を全く無視するわけではないが、後天的因子とくに小児期を重視した点にある。そしてこれが「教育によってどうにもならぬ」遺伝的要素を重視しないアメリカ人の思想と結びついてくる。アメリカ人はつねに確信をもって現実にたちむかってきたし、またそのかぎり「オプティミスティック」なのであって、これが精神分析の治療上の「オプティ

ミズム」と結びつくというのである。第二に、アメリカは自発性を尊重する教育の支配する国だと宮城氏はかんがえる。しかも精神分析は、たとえば「自由連想」のテクニックにみられるように患者の「自発性」を尊重する点で特徴的である。精神分析がアメリカで流行した第二の原因はこの点である。第三に、性欲が人間を動かす中心だというフロイトの考えは、二〇世紀、とくに第一次世界戦争後の「新しい」性風俗と性道徳にマツチしたものである。従来、アメリカでは、きわめて古くさいピュリタニズムの性道徳が支配していたが「精神的健康」をたもつためにリビドーを抑圧すべきでないというフロイトの主張は、ピュリタニズムの国には「新しい福音」になったというのである。⁽²⁾

みられるように宮城氏は、フロイト主義とアメリカの両方を、ともに「オプティミスティック」で、「自発的」で、さらに古いピュリタニズムを克服する「新しい」ものとしてえがき、ここからフロイト主義がアメリカで流行した理由を説明されている。

このような説明は正しいであろうか。わたくしは決して正しくないとかんがえる。すでにわれわれは、フロイト主義が文明にたいするもっとも極端なベシミズムであり、非合理主義であること、そのテクニックにおいてけつして「自発的」でなく、反対にきわめて権威主義的なものであること、また「新しい福音」であるどころか、本質的にもっとも保守的な生物学主義・本能主義であることをみなかったであろうか。重要なことは、アメリカ社会

とフロイト主義の双方から「新しく」みえる、外観だけをぬきだしてきて、両者を結びつけることではない。大切なことは、アメリカ社会の矛盾を全体的・本質的にとらえ、ここからアメリカ・イデオロギー、ならびにその一部分としてのフロイト主義を把握することである。旧稿『アメリカ心理学の批判』で引用したエンゲルスの言葉をもう一度くりかえしてみよう。エンゲルスは、一八九五年一月一六日、ゾルゲ宛の手紙で、「アメリカは世界中で一番新しく、しかも一番古い国である」⁽³⁾とのべた。その後、一九一七年の十月革命で、地球上に新しい国がうまれて以来、アメリカが「世界中で一番新しい」という規定はもはや通用しなくなった。しかし、外観上では「一番新しく」また本質的には「一番古い国」だという規定は今日でもそのままあてはまる。「アメリカ人は、無理もない歴史的な理由から、すべての理論問題でひどくおくれであり、なるほどヨーロッパから中世的制度はひきつがなかつたが、膨大な中世的伝統、すなわち宗教やイギリスの(封建的)慣習法や迷信や心霊術、要するにありとあらゆる種類の痴愚、すなわちビジネスには直接さしさわりがなくて大衆の愚昧化にはいまでもってこいのあらゆる種類の痴愚をひきついでいる」⁽⁴⁾のである。そしてまさにこのような土壌の上にこそ、かのプラグマティズム——それはジェームスによれば「ある古い考え方にたいする新しい名前」にすぎない——や、同じく「新しく」みえて実体は「古い」フロイト主義がさかえることができ、またさかえることが

要求されたのだ。もしフロイトが生まれず、フロイト主義がなかったとしても、独占資本支配下のアメリカ社会自体がフロイト主義をうみだしたのである。またプラグマティズム自身がフロイト主義になったであろう。事実、ジェームスは、フロイトの訪米よりもずっとまえに、フロイトとは独立に「無意識」の存在を「発見」し、ここからありとあらゆる種類の痴愚、すなわち幽霊、狐つき、思想転移、心霊術等々の「真理」を「証明」することができた。こうして、一九〇九年、フロイトが訪米したとき、かれをまさきに歓迎し、ほめたたえた哲学者がジェームスであったことはおどろくにあたらない。いや、ジェームスはフロイト主義をもっと「徹底化」することさえ要求した。「わたくしは、フロイトとその弟子たちが精神分析をそのぎりぎりまでおしすすめ、……：本当の心理学である『機能心理学』(?)⁽⁶⁾についてのわれわれの理解に寄与することを希望する」とかれは手紙の中のべた。同様のことは、フロイトの側からもいうことができる。「精神分析をある哲学体系と結びつけ、道徳的な事業(?)に奉仕させようという期待、この期待だけが、わたくしたちをして、強制神経症の素質にたいする反動からとくに倫理的な傾向をもっていたすぐれた人物をわずらわしたのです。また哲学者ウィリアム・ジェームスと会ったことはわたくしに忘れがたい印象をのこしました。わたくしはある小さい情景を忘れることができません。散歩をしているとき、ジェームスは突然たちどまり、わたくしに鞆をわた

して先に行くように申しました。そして狭心症の発作をおさえるとすぐあとからついてまいりました。⁽⁷⁾フロイトが精神分析をどんな「哲学体系」と結びつけようとしたのか説明する必要があるか。とくに右の文章の後半は象徴的である。フロイト主義はプラグマティズムに追隨しただけではない。むしろこれを「追いこし」、「徹底化」しさえしたのである。

ジェームスがフロイト「心理学」を歓迎し、フロイトがジェームスに「哲学」を学んだのち、フロイト主義は、プラグマティズムとともに、アメリカ・イデオロギーにおいて支配的な地位をしめるようになった。いまやわれわれは、プラグマティズムをはなれてフロイト主義ないしこれにもとづく社会心理学にふれることはできず、またフロイト主義ときりはなして、ジェームス・デュローイのプラグマティズムを批判することはできない。⁽⁸⁾フロイト主義とプラグマティズムは、現代アメリカ・イデオロギーのもっとも反科学的な、もっとも反動的な双生児にほかならないのである。フロイト主義がアメリカで流行する根本的理由は、宮城氏が美しく形容するようにアメリカが「オプティミスティック」で「自由」な国だからではけつしてない。反対に、帝国主義段階におけるアメリカ資本主義がそれを必要としたからである。そして実際、フロイト主義は、アメリカ帝国主義者の要求を反映し、またこれにこたえるだけの十分な「資格」をもっていた。フォスターがのべたように「すべての経済、政治、社会現象を不逞にも異常

心理によって説明しようとするフロイト主義は、いまや頹廢的なアメリカ・ブルジョア文化の分野を征服してしまった。⁽⁹⁾ アメリカ社会のありとあらゆる矛盾と悪徳と墮落のうちで、フロイト主義が「合理化」し弁護しなかったものは一つもない。戦争、マツカーシーイズム、最大限利潤の追求、人種的抑圧、神秘主義、淫売、殺人、暴力等々が、すべて永遠にかわらぬ「殺人本能」、「同性愛」、「性本能」、「所有本能」等々によって「説明」され、帝国主義者は完全に無罪放免されてしまったのである。

同様のことは、アメリカ心理学全般、とくに社会心理学についてもあてはまる。もちろん、フロイト主義だけがアメリカ心理学ないし社会心理学ではないといわれるかもしれない。しかしアメリカの現代心理学の主要な三つの流れ、すなわちフロイト主義、ゲシュタルト心理学、行動主義は各々相反しているようにみえながら、実は主として社会心理学のレヴェルにおいて、最近ますます接近し互いに折衷しあっている。フロイト主義はゲシュタルトの「フィールド理論」をとりいれ、⁽¹⁰⁾ また新行動主義もゲシュタルトとフロイト主義の概念をますますとりいれつつある。⁽¹¹⁾ たしかにフロイト主義を「批判」する社会心理学者はけっして少なくないが、これらの学者のうちで「フラストレーションの理論」を克服しているものはほとんどない。しかしこの「理論」こそ歴史的にも思想的にもフロイトやアドラーからうけつがれたものにすぎない。⁽¹²⁾ 私見によれば現代アメリカの社会心理学者のうちでもっと

も良心的なのはシェリフ夫妻であるが、フロイト主義をはげしく批判するかれらもまた、フロイト的な「集団理論」や「フラストレーションの理論」を一步もでていないのである。⁽¹³⁾

こうして、特殊的にはフロイト主義、一般的には社会心理学は、一切の社会的矛盾や国際関係をエセ心理学の概念で説明し、社会科学を「心理学」でおきかえる。それは、アメリカ帝国主義の弁護論であるだけでなく、労働者階級が社会の客観的経済法則を理解するのを妨げ、かれらを去勢し、無抵抗にさせる。アメリカの青年、いやアメリカ社会全体が今日、社会心理学的な見方によって、いかにレジスタンス的気風を失うようにされているかについて、田中寿美子女史はつぎのようにのべている。

「青年のおとなしさに拍車をかけるのは、アメリカの社会問題のとりあつかい方である。社会環境の改革を目ざした三〇年代の社会学的方法は時代おくれとされ、心理学的方法がふうびしている。物質文化のゆきわたった今日おこる社会問題の解決は、環境の整備によりも、人間行動の心理学的分析と、精神医学的治療によって、悪調整を調整しなおすことに重点がおかれる。この風潮は、いっそう知識層や青年層を社会的に不活潑にする。かれらはアメリカ社会の現状の批判は相当にするけれども、それはレジスタンスやプロテストにはならないで、人間の行動の心理的、内面的分析にはいりこん

でゆくのである。⁽¹⁴⁾

社会心理学がアメリカで、そしておそらく同様に日本で、いかにイデオロギー（虚偽意識）としての機能を果たしているかについて、これ以上の説明が必要であろうか。人間関係における混乱状態の結果として、今日、ますます沢山の人々が解決を、いや処方箋をさえ、社会心理学にもとめているとシェリフはいう。⁽¹⁵⁾ だが人々は、社会心理学に本当に解決と処方箋をもとめることができるであろうか。いや、実際は、パンをもとめてかえって石をあたえられるにすぎないであろう。社会心理学そのものが、現代資本主義の「混乱状態の結果」にほかならないからである。社会心理学は、まさに「社会心理学」であると自称するゆえに、旧来の「個人心理学」よりも、一層新しく、また具体化しているようにみえる。しかし本質的にみるばあい、それは、もともと観念論的な「社会学」が心理学化したものにほかならず、したがって「社会学」の一層の観念論化にすぎないのである。

では、マルクス主義の立場からみるばあい、いわゆる「社会心理」われわれの言葉でいえば「社会的意識」といわれるものを全然あつかう必要はないのであろうか。いや、まったく反対である。実際、マルクス主義ほど、「社会的意識」とその諸形態（労働者意識、農民意識その他）について大きな注意を払い、これに科学的な分析をくわえてきた思想は存在しない。しかしこのば

あい重要なことは、第一に、レーニンが「社会心理学」のロシア版であるボグダーノフの思想を批判したように⁽¹⁶⁾「社会的意識」と「社会的存在」をはっきり区別し、両者が同一でなく、「社会的存在」が一次的であり、「社会的意識」が二次的であることをはっきり確認し、史的観念論ではなくて史的唯物論の立場をはっきり堅持することである。そして第二に大切なことは、「人間の意識」（個人としての意識）と「社会的意識」の連関をうやむやにするのではなく、両者をはっきり区別し、科学的心理学と史的唯物論の対象を混同しないことである。ソ同盟における最近の討論の総括が示しているように、「人間の意識が心理学の対象である一方、社会的意識の研究は史的唯物論ならびにその他の社会科学の分野にぞくしている。」⁽¹⁷⁾ 心理学は「心理的現象の物質的基体——神経過程」の研究にもとづき心理的現象の諸法則を説明するが、「社会的意識」の研究は、史的唯物論、とくにイデオロギー論によっておこなわれる。この点をはっきり区別しなければ、科学的心理学の発展そのものが妨げられるだけでなく、史的唯物論ないしは社会科学自体も俗流化されてしまふ。レーニンが規定し、またパヴロフが主張したように、心理的諸現象の研究は本質上自然科学にぞくしている。心理的諸現象の研究が社会問題ないし社会科学からはなれて発展することはできないし、また人間の意識の内容が階級的であることはどんなに強調しても強調しすぎることはないが、しかしこのことは、心理的過程ならびに脳髓の

活動が階級的であることを決して意味しない。心理学と社会科学（とくにイデオロギー論）の対象と方法をはっきり区別すること、すなわち前者は心理的現象を実験的、自然科学的に解明し、後者は「社会的意識」を実践的・社会科学的に解明することを確認し、その上で両者の関連をあきらかにすること、このことによって、われわれはじめて「科学」を自称するアメリカ・イデオロギーの一形態「社会心理学」を積極的に批判することができる。今日、アメリカ帝国主義の側からするイデオロギー支配がわれわれに「心理学主義とマルキシズムの対決」を強要したことは、最初にのべたとおりである。しかし、この「対決」によって、どちらが心理学を本当に発展させることができるか、いまやあきらかである。

- 註(1) XIV, S. 78; *Vorlesungen*, S. 439.
 (2) 宮城音彌『精神分析の流行』、『思想』五二年一二月号。
 (3) Marx and Engels, *Letters to Americans*, N. Y., 1953, p. 269.
 (4) *Ibid.*, p. 164.
 (5) W. James, "What Psychical Research Has Accomplished," in *Will to Believe*, N. Y., 1897, pp. 321f.
 (6) R. B. Perry, *The Thought and Character of William James*, Briefer Version, Camb., 1948, p. 199.
 (7) XIV, S. 78.
 (8) Fromm, *Man for Himself*, pp. 28—31.; Dewey, *Human Nature and Conduct, An Introduction to Social*

Psychology, Modern Library Edition, 1930, pp. 86—87, 153.; Cf. L. S. Williamson, "An Approach to the Interpretation of Dreams," *Science & Society*, Winter, 1955, p. 24. また、村上仁『異常心理学』、『一六—一七—一八』参照。

- (9) Foster, *History of C. P. U. S.*, p. 535.
 (10) H. S. Sullivan, *op. cit.*, pp. 14—15, 368, 376, 381.
 (11) Cf. V. J. McGill, "The Mind-Body Problem in the Light of Recent Psychology," *Science & Society*, Fall, 1945, pp. 353, 357.
 (12) B. C. Мерлин, «Против реакционной теории в психологии», *Воп. Фил.*, No 5, 1953, стр. 221.
 (13) Cf. M. Sherif and C. Sherif, *Groups in Harmony and Tension*; Ю. А. Арбагов, «Социальная психология на службе монополий», *Воп. Фил.*, No 1, 1955, стр. 186—8.
 (14) 田中寿美子『アメリカ青年の「三代目」的性格』、『朝日新聞』、五五年七月二九日。
 (15) J. H. Rohrer and M. Sherif, ed., *Social Psychology at the Crossroads*, p. 1.
 (16) ノーニン『唯物論と経験批判論』、永田訳、四八〇—一、四八四—五ページ。
 (17) «О философских вопросах психологии», *Воп. Фил.*, No 4, 1954, стр. 186.
 (18) ノーニン『前掲書』三三二—三三三ページ。I. Pavlov, *Oeuvres choisies*, pp. 229, 475.

〔附記〕この論文は、昭和三〇年度文部省科学研究助成金による研究の一部である。一九五五年一〇月二〇日。